



明治政府がつくった 天皇という記号

私と共和制

人類思想の三分類と恋知

世界共通の暦

「元号は伝統」はウソ

なぜいまでも江戸城に

志賀直哉の言葉

天皇ismと理性

付録：「恋知」ポスター

2020年2月23日

武田 康弘

白樺教育館

<http://www.shirakaba.gr.jp/>

2021年2月14日 第2版 第6刷

明治政府がつくった天皇という記号

目次

1. 私と共和制 楽しい公共社会を生むために 1 ページ
2. 人類思想の三分類と恋知 23 ページ
3. 世界共通の暦 = 太陽暦は、エジプト暦→ユリウス暦→その補正 31 ページ
(元号を公共の場で使うのは困る)
4. 「元号は伝統」は、ウソ 35 ページ
5. なぜいまも江戸城に？ 39 ページ
「ポツダム宣言」全文 お勧め本 = マンガ「日本人と天皇」
6. 志賀直哉の言葉 天皇という記号 47 ページ
7. 天皇 system+ism は、集団同調ismを生み、
理性を育てません 53 ページ
- ・ 付録：「恋知」ポスター 67 ページ
(画と書・本村典子)

以上は、2019年に書いた天皇ismに関する論考をまとめたものです。1, 2 と 7 は単独で冊子にしましたが、それを含めて、日本人と日本社会のありようが分明になるように編んでみました。

この冊子が、皆さまの充実した生と、よき公共社会実現のためにお役に立てば、とても嬉しく思います。

冊子にするにあたり、今回もまた白樺同人の古林治さんに大変にお世話になりました。多大な貢献にただ感謝あるのみです。

武田康弘



同人誌『白樺』の表紙絵

南勲造 1912 (明治 45) 年 3 月 1 日発行

1. 私と共和制

楽しい公共社会を生むために

1. 私と共和制 楽しい公共社会を生むために 武田康弘

第1章 戦前と戦後の曖昧性

わたしは、小学生のときに明治維新の「天皇教」を知り、言葉にならぬ気持ち悪さを覚え、「天皇は生きている神」という思想の幼稚さと愚かさに呆れました。

いつも対話相手だった父に「なぜ明治政府の人はそんなバカげたことを考えたの？」と聞きましたが、幾度話を聞いて考えても、分かるどころか、戦前の天皇教のおぞましさにゾッとするばかりでした。

中学生の時に哲学に興味をもち、「自分で考える」ことを何よりの楽しみとした理由は、この天皇教の気持ち悪さが原因でしたし、さらにより深くは、幼児の時からの内臓疾患の苦しみでした。いわゆる病と死への面接から生きる意味を考えることがわたしの知的活動の中心となりました。

その双方を貫くのがソクラテスによるフィロソフィー(直訳語は「恋知」れんち)という実存思想で、それは、紀元前5世紀にソクラテスと同時にインド(生誕地はネパール)に現れたブッダの思想と重なり、少し遅れて中国に現れた老子の思想とも重なります。さらに言えば、中世の日本に現れた親鸞の思想、また20世紀フランスのサルトルとも重なります。みな広義の実存思想で、超越者・絶対者・神ではなく、最終的に自分自身の存在、「感じ・想い・考えるわたし」を拠り所とします。

わたしは子育て=教育に関わり生きてきましたが、こどもたちに教えることができるのは、「自分自身で考える力」をつけることで、特定の主義や宗教を教えてそこに誘導するのは禁じ手です。その時々々の政治権力者に従ったり、特定の宗教や主義に従うのでは、よく生きることにはなりません。異なる個性をもって生まれてくるのが人間ですので、それぞれがもつ人間としての尊厳を育てるのがほんとうの教育であることは疑いのない原理でしょう。

共和制は、それぞれの個性をもつ異なる人間が、対等で自由な存在として生きることを国の制度としても前提とする思想で、どの地域でも国でも、歴史の進み行きは、必然として共和制に行き着くはずです。古代の王制や君主制は、「一人ひとり

の人間の存在が等しく尊重されるとする普遍的な思想」の拡張に伴い長い年月の末に民主制に基づく政治へと変わってきました。21世紀の現代では王室をもつ国は極めて少数です。生れながらにして他とは違う一族がいるというのは、人間存在の対等性という原理とは背反するために、戦争や革命を期にだんだんと姿を消してきたわけです。

日本でも敗戦により天皇制は連合国の意思により消える運命にありましたが、アメリカ軍のマッカーサー司令官の判断で、日本の統治をスムーズに行い、日本を社会主義陣営との戦いの前線にする必要から、裕仁との握手で天皇制を存続させることが決まりました。米軍が日本全土を使い続ける権利とのバーターで、天皇家と米軍は利害が一致したのです。裕仁は、「沖縄は米軍が使用してほしい」と自から申し出ています。

日本の戦争犯罪を裁く東京裁判では、戦争責任は東条英機にあり、裕仁にはないというシナリオ（もちろん全くの嘘ですが）をつくり、東条はそれを受け入れて、天皇と天皇制を守りました。東条の処刑の七日後には、勝子夫人の元に皇居から勅使が来て「東条は本物だった」という裕仁の言葉が届けられました（1964年の暮に勝子夫人が長年にわたり宮内庁記者を勤めた板垣恭介さんに「居住まいを正して」話したこと）。

ここで大切なのは、「ポツダム宣言」（42～44 ページ参照）を受諾して敗戦した日本は、連合国との約束により民主化を進めることになり、新憲法の作成に取り掛かりますが、政府案も当時の二大政党（立憲政友会と立憲民政党）案もみな「大日本帝国憲法」の柱である**主権は天皇にある**は変えられないと主張したことです。もちろん民主政治の原理は人民主権≡国民主権ですから、連合国は到底認められないとして拒否しました。そこに現れたのが民間人七人による「主権は国民にあり、天皇は儀礼を司るのみ」とした憲法草案でした。戦前から「大原社会問題研究所」※（P18参照）で活躍していた高野岩三郎（研究所の所長で、日本統計学のパイオニア且つ労働運動の理論的支柱、徹底した民主制を志向する共和主義者の東大教授で戦後改組されたNHKの初代会長）の呼びかけで敗戦と同時に集まった民間人の草案でした。仕上げたのは憲法学者の鈴木安蔵（戦前の治安維持法違反で逮捕され投獄された最初の人）です。1945年の12月に発表され、それを連合国が注目し、直ちに英訳し参考にして英文で現「日本国憲法」草案をつくったのでした。

何より重要なことは、新憲法を作成するにあたり、最大の難所は、主権を天皇から国民に変える点にあったという事実です。伊藤博文は、天皇から臣民へ与える「大日本帝国憲法」について全国の府県会議長たちに「将来、いかなる事変に遭遇するも天皇は、上元首の位を保ち、決して主権は民衆に移らない」と教説しましたが、その思想=天皇教の根深さがよく分かります。

ともあれ、敗戦後、主権者が天皇から国民へとコペルニクス的転回をしたわけですが、これを曖昧にし、近代日本の歴史の意味をカオス化させたのが、昭和天皇裕仁の【退位さえもしない】という驚くべき行為でした。

憲法の全面改定により「人権思想に基づく民主制の国」へと変わったにも関わらず、裕仁がそのまま天皇という地位に留まった為に、日本の近現代史は混沌として意味の分からぬものとなりました。現人神！であった戦前も「人間宣言」をして人間！になった戦後も同じ「昭和時代」と呼ばれることになったのです。

これは、日本人全体の歴史認識を大きく狂わせてしまい、戦前の反省、その思想と行為の検討や批判を困難にしてしまいました。戦前は、学校で、天皇は生きている神と教えられ

ていたため、神国日本は絶対に負けないと信じ込み、どのような悲惨な戦いでも白旗を上げないで全員戦死を選ぶことをよしとし、いつまでも戦争を続け



サイパン島（子女も全員死を選び褒め称えられた） 藤田嗣治 画

ましたが、その結果、最後は2度の原爆投下（米軍は13発を用意して日本全土を壊滅させる作戦でした）でようやく「ポツダム宣言」を受諾して敗戦したのでした。それによる戦後の根本的な改革=出直しだったのですが、裕仁は、退位を勧める人たちの声を無視して天皇の地位に留まったために、戦前の明治天皇制と戦後の象徴天皇制との相違が曖昧となり、日本人みな歴史意識と社会と政治への考え方を歪めてしまったのです。

これは大きな負の遺産で、いまの安倍自民党政府に見られるように「戦前思想」

への回帰—明治礼賛の政治を復活させてしまう原因ともなっています。明治維新以降敗戦までの「天皇現人神」と、敗戦後の象徴天皇制との次元の相違がボカされて混沌とさせられていますが、いまの天皇の明仁さんや皇后の美智子さんは、それへの大きな違和をもち出来る限りの抵抗をしてきました。その最大の行為が「生前退位」です。岩倉具視や伊藤博文らがつくった天皇教（=靖国思想=国体思想）では、天皇は神であり、その死によってのみ時代は変わる=新元号となるので、退位は認められないとするのが明治から続く思想と制度でしたが、それを壊したのが、今回の明仁さんの決断でした。

なお、ここで敗戦時に昭和天皇の裕仁について兵士はどう思っていたかのエピソードをご紹介します。日本人の多くは敗戦後も「天皇現人神」という深い洗脳が解き切れなかった為に、なかなか表には出せなかった赤裸々な心の声です。わたしのblog「思索の日記」2018年8月16日から。

「天皇はのうのうと生き延びた！」 元兵士の憤りの声—ある証言

わたしの義父の関根竹治さんは、1923年12月に埼玉県蓮田市に生まれた関根家の長男でしたが、2010年8月に亡くなりました。

農家の総本家の長男で、頭はしっかりし心も強かったですが、先祖代々の農家の後継ぎでしたから政治思想などは特になく、ふつうに保守的な人でした。政治の話、まして天皇の話などをしたことはありませんでしたが、亡くなる数年前のお盆の時、親戚一同の前で驚くべき発言をしました。



みなで、テレビで、終戦記念の番組を見ていたとき、わたしは、「東京裁判で東条英機が罪をかぶり絞首刑になったが、ほんとうは、昭和天皇に大きな責任があるはず」と発言しました。親戚一同は何も言わずに黙っていましたが、

その時、竹治さんは、大きな声で断固とした調子で「そうなんだ！」「わしら兵隊はみな、天皇は、自害するものと思っていた。」「だが、天皇は、のうのうと生き延びた！！」と言い、赤紙一枚で、無意味な戦争に行かされ、農民は、どれだけ大変な思いをしたか、を話しました。

誰もが口を聞けませんでした。心からの明晰な声、揺るぎない言葉にみな黙るほ

かありませんでした。始めて聞く竹治さんが話す兵隊たちの思いに啞然となりました。

自害どころか退位さえしないで、最高責任者がそのまま天皇の名で、「のうのうと生き延びた！」ことに、強い憤りをもつ竹治さんの声は、誰の耳にも心の真実を伝えたのでした。

第2章 国体思想 = 靖国思想

いまなお「天皇教」に嵌（はま）る人たち 「日本会議」の愚かさ

民主制とその内実である人権思想に馴染んでいない人から見れば、いま大手を振るウヨク団体「日本会議」の主張は、荒唐無稽であり危険思想と考えるでしょうが、そういう主張の団体に大多数の閣僚（公明党以外）と自民党国会議員が名を連ねているのを見ると、情けなく思います。

日本会議が出しているブックレット『皇位継承の伝統を守ろう！』（明成社刊）では、彼らの中心者の一人である藤原正彦（数学者・お茶の水女子大学名誉教授・『国家の品格』の著者）が以下のように書いています。

「天皇家の根幹は万世一系である。万世一系とは、神武天皇以来、男系天皇のみを擁立してきたということである。男系とは、父親→父親→父親とたどると必ず神武天皇にたどりつくということである。これまでは八人十代の女性天皇がいたが、すべて適任の男系が成長するまでの中継ぎである。・・・・・・・・

これを変える権利は、国会にも首相にもない。天皇ご自身にさえない。国民にもないことをここではっきりさせておく。飛鳥奈良の時代から明治大正昭和に至る全国民の願いを、現在の国民が蹂躪することは許されないからである。」

神武から続く125代の天皇、というのが事実と反することは、実証的な日本史家に共通する認識ですが、それを無視して神話を現実とする藤原教授の言辞には呆れます。土台、天武天皇以前には「天皇」という言葉すら日本にはなかったのです。また、小中学生が習う日本の歴史でも、南北朝で、天皇家同士が骨肉の争いをし、30年以上も内乱が続き、互いに自分たちが正統だと言い張ったことが書かれ

ています。血の正統性という話は、史実ではなくフィクションであることは日本史の常識です。宮内庁ですら史実だとはしていません。さらに言えば、誰でもみな「太古から続く系譜の持ち主」です。ただ家系図が残っていないだけのことで（笑）。

※史実は以下の通りです。

中国から輸入した「天皇」という称号は、壬申の乱で勝利して王権を受け継いだ天武天皇(673年～689年、「日本書紀」の編纂を命じて、自身の王権の正当性を記させた)がはじめて用いたものでした(それ以前は「王」・「大王」)。しかし、天皇という称号はその後300年間弱のみで、平安時代前期の村上天皇を最後に使用されなくなりました。天皇家の権力が弱まり、京都周辺のローカルな王権になったことに符合して、「〇〇院」と称されるようになったのです。再び天皇の称号が復活したのは、それから800年以上経ち、徳川幕府の力に陰りが出てきた江戸時代の後半、光格天皇からで、現代まで240年間のことです(詳しくは『名前によむ天皇の歴史』(遠山美都男著・朝日新書)を参照)。合わせても540年間ほどの時間に過ぎません。

ともあれ、明治維新の尊王攘夷思想による天皇現人神の政治(国家カルト思想)をよしとし、そこに戻そうとするウヨク団体「日本会議」が大手を振るい、保守党の議員の多くがそのメンバーという日本の現実には寒気がします。いま、天皇という役を担う人自身も困惑する「国体主義」によって日本をまとめようとするのは、時代錯誤的という以上に、狂氣的と評するよりほかに言葉がありません。

明治維新が依拠し、国民に浸透させた国体=靖国思想とその現実化

伊藤博文や山県有朋らの維新の思想は、彼らの師である吉田松陰が、天皇を神とする純粋な信仰と激しい情熱(死ぬことで自身の尊王思想を現実化させようとする強烈な意思)によって生み出した尊王攘夷ですが、それは、後期水戸学と国学による「天皇教」で、長い武家社会の中で神職の代表者を務めてきた皇室の長を、生きている神として崇め、現実政治の中心者にもするという近代社会を拓く思想としてはありえない「禁じ手」を用いて、政府が全国民を一つにまとめあげるといったものでした。その劇薬の負の遺産=悪しき明治の伝統は、今日の日本を



明治天皇が所持していた
狡知な表情の伊藤博文

覆い、日本人の精神的自立＝実存としての生を阻んでいます（それについては「[恋知](#)」1章と2章に記しました）。

更に、そこで生みだした国体＝靖国思想を、7世紀後半から8世紀初めに成立した律令国家に投影＝逆照射させて、日本の歴史はすべて天皇によるものという【強烈な天皇史観】（もちろん真っ赤なウソ）をつくりあげたのでした。

ただし、7世紀に律令政治を拓いた聖徳太子（複数の人物の集合と言われるが、厩戸の皇子（うまやどのおうじは個人として実在）の「十七条の憲法」では、当時、最先端にして唯一の体系的思想であった仏教を中心とする国づくりを宣言しましたが、明治維新はアベコベで廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）でした。各地で寺や仏像が壊されて、その上に神社が建てられたのでした。首都圏の有名な神社である上野東照宮や鶴岡八幡宮もそうですし、武蔵御嶽神社も筑波山神社も1000年以上続いた寺を壊してつくられたものです。全国では驚くことに数万以上の寺が壊されました。仏教のもつ徹底した平等思想と平和主義が明治の富国強兵の思想とは相容れないことが深因といえます。「神仏分離令」に基づく廃仏毀釈のあまりにも過激な運動の広がりには明治政府も驚き慌て、沈静化をはからなければならなくなりました。

伊藤博文らの明治政府要人（ほぼ長州藩出身者）の先生格であった福沢諭吉は、最初は、天皇を神として日本を統一するという思想はとて受け入れられないだろうと批判的でしたが、意外にも国民は、強い政府の方針に従い「天皇現人神」を受け入れる様子を見せたために、次第に諭吉も天皇教を支援することになりました。漢学を断ち欧化路線（「アジア」の悪友たちと縁を切る）をすすめた諭吉は、【欧米化と天皇教との合体】による日本をつくるために邁進しました。中江兆民の中国と欧州の双方の文明から学ぶべきという思想は退けられたのです。

ルソーがつくった人民主権による民主政治の原理『社会契約論』の邦訳者でもあった中江兆民が死去（1901年・明治34年）した9年後には「大逆事件」が起き、兆民の弟子で優れた知識人であった幸徳秋水は無実の罪で死刑になりました。この事件を期に（1910年・明治43年）、政府側の知識人であった森鷗外さえも社会問題と絡めた小説を断念し、「歴史小説」に限定せざるを得なくなります。

しかし、同じ年に、自由と個性尊重を謳う同人誌『白樺』が発刊され、社会問題には疎かった志賀直哉も秋水の刑死を知り「憤まんやるかたなし。」と記しています。皇室の藩屏＝「学習院」卒の若者たちという特権ゆえの大胆な文化運動（日本最大の総合的な文化運動で白樺山脈と呼ばれた）でしたが、1923年の関東大震

災により廃刊となります。

その後、1930年代（昭和初期）からは、西欧思想（実証主義・合理主義・個人主義）への政府の批判が激しくなり、文部省主導の「国体明徴運動」が猛威を振るい、欧米の思想の大元とされる「個人主義」への排撃がなされたのです。

いま、教育改革や皇室問題の政府の諮問委員で安倍首相の友人・八木秀次麗澤大学教授の『明治憲法の思想』（PHP 新書）・『反-人権宣言』（ちくま新書）に露わな欧米思想＝「個人」への激しい敵対は、この時に文部省から出された『国体の本義』（1937年刊・173万部）と同一思想によります。八木は、「欧米の個人主義がつくった『人権』に日本はなじまない。日本人は人権という言葉に怯えずに、国民の常識に戻るべき」（「反-人権宣言」）と主張します。

話が進みすぎて現代まで来てしまいましたので、時間を戻しますが、明治維新が成立すると、京都御所に暮らしていた若干15歳の睦仁（むつひと 怪死した孝明天皇の子）は、江戸城（皇居）に連れて来られ、伊藤博文や山県有朋らにより「明治天皇」＝現人神になるべく教育されていきました。明治半ば、睦仁30代の終わりには維新の思想は現実化され、天皇から臣民に恩寵として与えられるとする「大日本帝国憲法」が公布され、「教育勅語」や「軍人勅諭」などの上下道徳も完成し、国民の皇民化が進みました。いま、「伝統」と呼ばれている習俗や習慣（例えば初詣など）もこのころにつくられたものが多いのです。

明治2年（1869年）には、維新政府側の兵士の戦死者のみを祀る施設＝「東京招魂社」を建立しましたが、それを10年後に「靖国神社」と改名しました。従来の神社とは異なり、味方（官軍）だけを祀り、死者を官側国家の集合神にするというものでしたので、神社とは呼べなかったのですが、維新政府は、なしくずし的に神社としてしまうと同時に、政府による全国の神社の格付けが行われて「国家神道」（この名称は戦後に付けられたもの）が誕生することになりました。

また、伊藤博文は、東京中心にそれまで国有地（徳川家関連）だった土地を次々と天皇家所有とする名義書替を行いましたので、皇室は天文学的な量の財産を所有することになりました。絶対的な権力と権威を独占する人（現人神）にふさわしい物質的基盤がつけられたのでした。現在、上野恩賜公園や浜離宮恩賜庭園はじめ、あちこちの公園や庭園が、天皇から賜った公園・庭園となっているのは、そう

いう事情です。もともと天皇家は東京やその周辺に財産など持っていませんでした。

安倍政権の明治礼賛と明仁さん美智子さんの思いとの落差

明治の天皇制は近代天皇制とも呼ばれますが、このようにして極めて意図的に作りあげられた代物で、**日本の伝統などと呼ばれたものではありません**。この事情をよく知る明仁さんや美智子さんは、いまの「日本国憲法」における象徴天皇制の方がはるかに伝統に近く、「明治天皇制」は鬼子であり異質なものと見ていることは明白です。例をあげればキリがないのですが、特徴的なものを一つ記します。

伊藤博文が4人で極秘に草案をつくった明治憲法(大日本帝国憲法)が誕生する以前に、日本の各地で民衆による憲法草案がつくられていましたが、その一つである「五日市憲法草案」(1968年に民衆史の著名な歴史家・色川大吉が発見)を以前に現地に来て足を運び見てきた天皇夫妻は、深く感銘を受けたと言い、美智子さんはその感想を文章にしていますので、宮内庁ホームページから転写します。

「5月(2014年)の憲法記念日をはさみ、今年は憲法をめぐる、例年に増して盛んな論議が取り交わされていたように感じます。主に新聞紙上でこうした論議に触れながら、かつて、あきる野市の五日市を訪れた時、郷土館で見せて頂いた「五日市憲法草案」のことをしきりに思い出しておりました。明治憲法の公布(明治22年=1889年)に先立ち、地域の小学校の教員、地主や農民が、寄り合い、討議を重ねて書き上げた民間の憲法草案で、基本的人権の尊重や教育の自由の保障及び教育を受ける義務、法の下での平等、更に言論の自由、信教の自由など、204条が書かれており、地方自治権等についても記されています。当時これに類する民間の憲法草案が、日本各地の少なくとも40数か所で作られていたと聞きましたが、近代日本の黎明期に生きた人々の、政治参加への強い意欲や、自国の未来に向けた熱い願いに触れ、深い感銘を覚えたことでした。長い鎖国を経た19世紀末の日本で、市井の人々の間に既に育っていた民権意識を記録するものとして、世界でも珍しい文化遺産ではないかと思えます。」(皇后・美智子)

なお、西暦表記と下線は武田による。

天皇や皇后という役をこなす明仁さんや美智子さんが示す戦後民主主義におけ

る天皇制の位地づけと、日本会議に集まるいまの保守政治家が思う天皇や皇室への見方の大きなズレは、最初に書きましたように、昭和天皇裕仁の「退位さえもしない」という驚くべき行為にその最大の原因があるのですが、では、この混乱をどのようにしたら乗り越えられるかを考えてみたいと思います。

歴史を変えることはできませんので、前に向けて新たな世界を拓くにはどうするか、です。

第3章 「天皇」システムの維持は困難・共和制へのスムーズな移行が必要

タブーをつくと欠陥国家になります。

わたしたちが社会問題について考えるとき、もしも、考えてはいけないことが決まっていたら、それは民主制（政）社会ではなく、よき公共性を生むことができません。自由に考え意見表明ができない国は「欠陥国家」というほかありません。

欠陥国家に住む人は、豊かでのびのびとした生を営めず、心に浮かぶありのままの「想いや憧れ」を隠して生きることになります。ウソを抱え、自己を欺瞞して生きるのでは、根源的な不幸に落ちてしまいます。

大きなタブーをもつ社会は、豊かな人間性とは無縁で、明るさや輝き、艶(つや)やかなよろこびに乏しい社会、国にならざるをえないのです。

わたしは、1952年5月に神田に生まれ育ち、今年2019年に67歳になります。わたしが生きてきたのは、主権者を国民とする戦後の社会なのに、明治政府がつくった「天皇は偉い人」という想念とその絶対化はずっと続いていて、皇室や天皇制について自由に意見を言うのはタブーでした。マスコミでは天皇制に関する議論は行われず、テレビの討論番組でも、皇室や天皇問題では、「天皇」というシステムをよしとする側に立つ話者しか出演できず、異論を述べる人は排除されて、まるで「非国民」のような扱いです。ずいぶんと偏っていて、『日本国憲法』が保障する個人の尊重・思想および良心の自由・法の下での平等はどこにあるのかと思います。どうして日本では自由が認められないのでしょうか。

どなたも学校教育で経験済みでしょうが、「ほんとうの自分の心」が表明できない空気が全体を覆い、いつしか本音と建前が入り組んで、その区別さえできない人間になっていきます。自分の気持ちや考えは学校の「作文」には書けず、会社でも同じです。周囲に同化して生きること＝「他者承認」に怯える人となることを当然とする社会が出来上がり、そうでない人は「無視」され、いないことにされます。高度に発達した世界No.1の管理社会で、学習からスポーツ、趣味まですべてに「正しい」型が決められています。テレビは各種専門家・評論家であふれ、数知れずの「検定試験」がつくられて、それを通るために学習、否、勉強をします。社会全体の「学校化」の完成です。日本では人間の理想はAIなのでしょう（笑）。人間の生が内的関心＝広義の欲望から始まるのではなく、あらかじめ決められている「正しい型」に到達するために生きるのです。外にある価値基準（世間的評価）に合わせて一生を送ります。強迫神経症者のごとくです。そういう精神状況を、ヘーゲルの他者承認の概念を用いて正当化する学者まで現れます。病気の進行が止まりません。

こういう事態を引き起こすのは、特定家族を高貴なものとし、最大級の特殊な敬語で遇し、生まれた赤ちゃんも「さま」づけで呼ぶ皇室制度があることが原因だ、と単純に決めつけることはできませんが、「形と序列」の二文字ですべてが収まるような形式優先で中身の薄い儀礼・儀式重視の社会をなんとかしないとイケないのは確かです。大きなタブーのある社会では、「型ハマリで生きる不幸」から脱け出れなくなります。それでは、中身・内容の豊かな意味充実の人にはなれず、内から内発的・主体的に生きることができません。学校名や家柄や年収や国籍など＝形式で人をみる下品な人間に堕ちます。

ここに記した困った問題は、社会制度を変えればすべて解決するとはいきませんが、解決のための必要条件とは言えます。

シチズンシップ（市民精神）により State としての国がつくられます。

古代では、祭政一致（祭祀を司る者と政治を司る者が同じ）であったため、政治のことを政（まつりごと）と呼びました。しかし、わたしたちの近代市民社会の国では、主権者は、王でも貴族でも政治家でも官僚でもなく、人民≡国民にありますの

で、なによりも大切なのは、一人ひとりの考え判断する力ということになります。

紀元前5世紀にアテネで民主政治を宣言したペリクレスは、次のように述べています（長いので要約して一部分のみ）。

「われらの政体は、少数者の独占を排し、多数者の公平を守ることを旨とし、民主政治と呼ばれる。我らは自由に公共につくす道を持ち、他人の猜疑心を恐れることなく、各々が自由な生活を享受する。

教育においても同様で、過酷な訓練ではなく、自由の気風により規律の強要によらず、勇気の気質の涵養によるが、ここにわれらの利点がある。我らは、質朴たる「美」を愛し、軟弱に墮つすることなき「知」を愛する。我らは富を行動の礎とするが、いたずらに富を誇らない。

我らは、国政の進むべき道に十分な判断をもつように心得る。我ら市民は、決議を求められれば、判断を下し得るのはもちろん、提起された問題を正しく理解することができる。

我らのみが、利害損得に囚われずに、自由人たる信念をもって、結果を恐れずに人を助ける。ポリスの市民は、人生の広い諸活動に通暁し、自由人の品位を持し、己の知性の円熟を期することができる。」

ここで分かるのは、民主政社会では、一人ひとりの人間の精神的自立を何よりも必要としますので、「市民」(シチズン)という概念がキーワードになるということです。では、市民とはなんでしょうか。

市民とは、この社会・国をつくる主体者のことです。自分はこの社会・国に住む一人の人間だ、というのではなく、自分はこの社会をつくっている一員なのだ、という自覚をもつ人のことです。公民＝公共人＝社会人(主体性・公共性をもつ個人)のことであり、国籍や民族という概念が主題となるものではありません。その地域に住む人が、人間としての対等性と自由を互いに認め合い、意思とお金を出し合ってつくるのが民主主義の国です。主権者は市民ですので、市民精神(シチズンシップ)に基づいて国をつくれれば、共和制の国(民主制のほんらいの姿)となります。ベートーヴェンの第九交響曲は、全人類が共和制の下でそれぞれの歓喜を謳うというイデーの表現ですので、世界的な普遍性をもつわけです。

王や絶対者のいない社会＝共和制の社会をつくるためには、幼いころからの教育がキーになります。順番を踏んで一步一步、自分たちのことは自分たちで決める

実践の積み上げが必要で、「考え、対話し、決定する」という普段の行為が求められます。いま、欧米の小中学校で行われている広義の哲学教育（互いの考えを聞き合い、言い合い、それを繰り返すことで段々と自他共に納得できる考えに鍛えていく実践教育）がそのための柱で、国連でも勧めています。日本にはそうした教育はなく、各教科の受験勉強（東大病・東大教）です。自分の頭で考えるのではなく、丸覚えと解法のパターンを身に付けるというレベルに留まっています。教育の本質的前進がありません。どんどん退化していきます。

欧州には王室が残っている国もありますが、それらは歴史の名残であり、特別な人間として扱われるのではなく、特定の宗教や儀式をもつ存在でもなく、ふつうの市民社会に溶け込んで、一般の人とあまり変わらない生活をしています。英国を除けば特別待遇はされていません。英国は、民主政治の伝統が17世紀のジョン・ロックによるピューリタン（キリスト教原理主義）思想に基づくものです。古代アテネに範をとるフランスのルソー（生まれはジュネーブ）の思想とは異なるからです。ただし、英国でも王であれ議会の決定に背くと裁判にかけられ、処刑されたこともあります。

皇室の人たちも不幸になる「天皇」システム。

先に書きましたように、律令政治がはじまって300年もしないうちに、天皇は実権を失い、京都周辺のローカル王となりましたので、「○○院」となり、天皇とは呼ばれなくなりました。平安時代前期から江戸時代後期まで800年間以上は天皇と呼ばれる存在はなく、江戸後期の光格天皇から「天皇」という称号が復活したのです。今上（きんじょう）とか御門（みかど）などと呼ばれた「○○院」は、時々の支配者たちの権力を聖化するアイテムとして用いられ、存続してきました。天皇が政治的な力をもったのは、明治維新の尊王攘夷（後、尊王開国）思想により70数年ほどですが、明治政府の驚くほど徹底した【天皇史観＝日本史の改ざんと天皇教の洗脳教育】は、いまも残り、大臣たちが加盟しているウヨク団体「日本会議」の思想となっています。笑い話のようですが、国会売店で売られている湯呑には、【歴代天皇一覧】として、神武から平成まで125代の天皇名（大多数は天皇ではなかったにも関わらず）が記されています。政治に関わる人は、まじめに実証的に



日本史に取り組んでほしいものです。

平成の天皇、明仁（あきひと）さんが、学友たちに「世襲の職業はいやなものだね。」と語っていましたが、その気持ちは、誰もがよく分かると思います。まして、明仁さんの父は、敗戦まで現人神＝生きている神とされ、その教育の中で、皇太子の明仁さんも「わたしは軍国少年だった」と言う通り、臣民とされた国民と同じ思想に染められていて、その反省から種々の象徴としての行為を行ってきたのです。今年2019年に、明治に郷愁をもつ安倍政府の反対をはねのけてようやく「退位」が出来るわけです。

考えてもみてください。日本国憲法1条は、「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。」です。

日本国の象徴（シンボル）で日本国民みなを統合する象徴になる、それが出来る人などいるのでしょうか。あなたがそれをしてください、と言われたらどうでしょうか。

そういう「職業」（明仁さんの言葉）を世襲で行う一家がいて、その人たちには選挙権をはじめ離婚する権利もなく、国籍も住民票もありませんし、パスポートも発行されません。雅子さんは愛子さんが生まれる時、母子手帳がもらえないので、千代田区役所に請求しましたが、一人の人間としての基本的人権がないのです。へんな話で済みませんが、もし罪を犯したとしても裁く法がありません。発言の自由もありませんが、そのかわり年に数億円（以前は6億円程度でしたが今は3億円台）の生活費が保障されはします（それとは別に宮内庁の予算は180億円前後です）。

基本的人権が奪われている人間を「象徴」という職業につかせ、天皇や皇室にしかな用いられない特殊な言葉で遇し、最大級の敬語を用い、呼び名も陛下とか殿下とします。わたしは子どもたちに聞かれていつも返答に窮します。皇室の人やそこに生まれた子は「特別（高貴）」な存在なので敬語でよびますが、あなたやあなたのお母さん・お父さんは平民なので、ふつうの呼び名なのですよ！？ う～～ん、納得できる子はいません。

一方で、人間に生まれによる上下はない、差別はいけないと教え、他方では、天皇家は偉い人の集まりなので敬語を使いなさい、というのは酷すぎる話です。差別は、する側もされる側も人間の善美への憧れ心や正直さを失わせてしまいます。皇室に生まれた人もそうでない人（ほぼ全員）も被害者となります。

では、どのような社会・国をつくるのがよいか。その骨子は、すでに2017年にfbやBlogで発表していますので、一部加筆して以下に載せます。

バーチャル政党 = **【民主共和党】** (民主政を前に進める共和主義)、瑞々しい「水の国=日本」にふさわしい人間に優しく平等な国へ～～～

基本の考え

まず、首相のほかに**【大統領】** (日本の顔=元首で政治権力は持たない・ただし、首相の国会解散を拒否する権利をもつ) を選ぶ。

ふさわしいのは学問・芸術に通じた品格の高い人—例えば石橋湛山 (哲学者・経済学者・ジャーナリストで55代総理大臣)。※ 高野岩三郎 (戦前に東大教授を辞して社会問題研究所所長・戦後に改組されたNHKの初代会長。庶民派にして高潔)。大原孫三郎 (中国電力やクラレの創始者で白樺派の同伴者—心優しい博識の実業家) のような人。

国旗は「日の丸」が候補。国歌は「さくら」 (日本古謡) が候補。国花もさくらなので、ピッタリと思う。共に国民の自由な議論で決まります。「君が代」は、明治天皇に捧げられた皇族の歌なので (ゆえに皇族は歌いません)、主権者が国民に変わった現代には不似合いです。なお、歌詞は古今和歌集からで、天皇とは無関係です。

元号は個人の趣向で自由に用い、役所や公共機関では、世界歴 (ユリウス暦を修正したグレゴリオ暦) を使用する (今の元号の義務付けは不合理で間違いが生じやすいので。例えば、パブロ・ピカソ 1881年～1973年、棟方志功 明治36年～昭和50年ではとても困りますし、時間が通年とならずブツ切れになるは不味いです)。

天皇家は、ほんとうの住まいである京都御所に。江戸城は、江戸公園として国民みなに開放。

天皇は、国事行為は行わず、文化的行為と国際交流を行い、基本的人権が保障さ

れる（いま天皇がしている国事行為は大統領が行う）。

簡単ですが、骨子です。この線で市民（＝公民）憲法案も出さねば、です。基本となる1条から5条の骨子は、以下です。

1条 日本国の主権は、公民にある。

2条 元首は大統領で、公民の直接選挙で選ばれる。大統領は国事行為を行うが、政治権力をもたない。ただし、首相の国会解散への拒否権をもつ。

3条 皇室は、伝統と文化の象徴としての役割を担う。住居は京都御所とする。

4条 戦争放棄 日本国は、武力の行使、武力による威嚇を行わない。専守防衛に徹する最低限の軍事力は持つが、いかなる理由でも海外への派兵は行わない。

5条 人権の尊重 個人の思想と行為は、公共の福祉に反しないかぎり、最大限に尊重される。（個々の人権規定は現日本国憲法を踏襲し、さらに徹底させる。在日外国人の人権保障も加える）



なお、日本の初代大統領としては、優しさと強さを併せ持つ人、明晰で品位の高い人、国際感覚に優れた人が適していますので、わたしは、官邸の圧力で降板させられるまではNHKの顔だった国谷裕子（くにや ひろこ）さんを推します。

なにはともあれ、オープンに共和制の意味や意義について語れる状況を生み出すことは、とてもよいこと、大事なことです。

大きなタブーがあることは、ひどく不健康ですからね。

細かな話はともかく、みなが、明治維新政府によってつくられた水戸学に基づく「明治天皇制＝国体思想＝靖国思想＝国家神道」の国家カルト的な精神風土から解放されて自由になることは、何より大切な「はじめの一步」と思っています。

集団同調主義（天皇教）でもなければドライな強権でもなく、水の国＝日本に

ふさわしいしなやかで自由な共和主義って、いいでしょ〜〜

※ 高野岩三郎は、戦前、東大に経済学部を創設した人で、日本統計学のパイオニア。東大教授を辞し、白樺派の同伴者でもあった実業家・大原孫三郎の発案と出資でつくられた「大原社会問題研究所」の所長となり、最新の統計学を基に労働運動などの研究に取り組んだ。その陣容は東大や京大に匹敵し、研究内容は日本最高峰と評された。今年2019年は創設100周年にあたり、法政大学内に移されて存続している大原社会問題研究所では、記念行事を行っている。なお、「高野岩三郎伝」(岩波書店)は、必読文献。

彼はまた、敗戦後、民間人による憲法草案(憲法研究会による)の作成者の一人だが、それは、高野が鈴木安蔵に「鈴木君、憲法の問題は政府にまかせては駄目だから、我々の手で運動を起こさねばならぬ、すぐに着手するように」と言ったことによる。憲法研究会のこの草案は、GHQが「日本国憲法」草案をつくるときに参照した。ただし、高野自身は天皇制を残すことには強く反対して共和制への移行を主張し、草案とは別に「日本共和国憲法私案要綱」を出している。

戦後に改組されたNHKの初代会長も務め、放送の民主化に尽力した。

海外に開かれた港町の長崎に生まれ、自由な下町の神田で育った高野は、家父長制とは全く無縁で、根っからの共和主義者だった。理と情を併せ持ち、誰からも愛された反骨の人。

第4章 未来を開くのは、温故知新の実存思想

天皇は一番偉い人で、一番尊い家族は天皇家、一番偉い大学は東京大学、一番偉い職業は高級官僚?・・・一番という思想で生きる社会は、幸せでしょうか。どうもそうは思えません。納得ではなく、比較と競争が原理では、一人ひとりの人間存在への愛と尊敬は薄まり、生きるよろこびは広がりません。心豊かな人生にならず、楽しい公共社会もつくれません。まして、皇室とか天皇となると、世襲ですから誰も手の届かない「超越」になってしまいます。

ブッダ(釈迦)の中心思想は、誰でも皆、比較を超えた最高の存在として生まれてきたという「天上天下唯我独尊」(てんじょうてんげゆいがどくそん)です。SMA P最大の人気曲だった「世界に一つだけの花」(300万枚超)は、その分かりやすい現代バージョンです。

ほぼ同時代(紀元前5世紀)に活躍したソクラテスも、名前や生まれではなく、

エロス(恋愛)を動力源として一人ひとりの考える力と善美に憧れる心に依拠して生きること、それが人間の最高の生とします。

女性原理(フェミニズム)につく中国の老子(紀元前4~3世紀)も、水のようなしなやかさを理想とし、無為自然を尊び、君子道德の孔子(儒学)を厳しく批判します。

古代のエーゲ海とインド(ネパール)と中国に現れた三つの思想は、みな権力や権威とは無縁で、一人ひとりの人間存在に立脚した【実存思想】でした。国家主義とも、その後に現れた「世界は唯一人の神がつくった」という一神教とも、元から異なります。

※**人類思想の俯瞰**【人類思想の三分類「儒教・儒学」、「ソクラテス・ブッダ・老子の実存思想」、「キリスト教・イスラム教などの一神教」と「恋知】は24~30ページをご覧ください。

なお、米国在住の言語学者・三枝恭子さんによる英訳が白樺教育観ホームページ([教育館だより 193.](#))に、日本在住のユダヤ系イギリス人、ジョナサン=Jonathan Levyによる英訳が[196.](#)にあります。フランス語訳、ドイツ語訳も進行中です。

一人ひとりの人間への愛と信頼にもとづく実存思想は、人間の平等や個々人の自由による民主的な統治=自治政治を支える公共思想につながり、人権思想の土台ですが、それを知らないのは、明治になって欧米から直輸入した学問(キリスト教思想に基づく)のみを基準とする日本の「知識人」たちで、例えば、今なお大学教授や評論家などに影響をもつ小室直樹(1932-2010)は、キリスト教という一神教がなければ、人権も民主主義も憲法も成立しないと教説し、疑似的な一神教である「天皇教」を否定した戦後を批判します。三島由紀夫の「天皇陛下万歳」と市ヶ谷自衛隊駐屯地での割腹自殺を高く評価します。

小室のように、強い宗教である一神教を人類文明の礎とする思想は、サルトルやポンティーの訳者・解説者である哲学者で、私の師でもあった竹内芳郎(1924-2016)までも同じです。キリスト教のもつ超越性原理は、世俗のすべての価値を相対化するとして評価し、親近感を持っていました。ただし小室とは異なり、世俗の集団同調主義の別名でしかない「天皇教」については厳しく批判していました。

わたしは、日本の知識人たちの論理が的外れになるのは、彼らの知が、読書と情報知に依拠していて、なまの体験に乏しく、赤裸々な人間存在のありようを知らないからと見ています。戦前も二大哲学者といわれた西田幾多郎、田辺元をはじめ大

多数の大学人は、天皇教を支持して戦争協力をしました。

人間存在の真実を知るには、書物によるのではなく、体験が必要です。何よりもまず幼子と関わることです。幼子と共に見、聞き、感じ、知ること。幼子や子どもと遊び、共によろこび、かなしみ、怖がり、怒ること。それがあって初めて、人間と社会についての思想は意味と価値を持つようになります。何事であれ、体験学習・体験思考をしないと、思想は単なる言語ゲームに陥ってしまいます。権威主義になり、特定観念に呪縛されて自由を失うのです。「学者とは学問をすることで馬鹿になった人種のことだ」では哀れです。

※**人権思想の淵源**は一神教ではなく、幼子の存在であり、宗教とは無関係ですが、それについては『白樺教育館ホームページ』【[174. 人権思想の淵源は、宗教（一神教）や哲学（理論体系の哲学及び人生哲学）ではなく、幼子の存在です。](#)】をご覧ください。なお、[177.](#)には英語版もあります。

一神教は、すべてを超越した「神」という概念をつくり、私は「神」と向きあい対話することで、世俗の価値意識を超えて思考できるとします。それにより自己省察も可能となり、真理を得るというわけですが、確かに自己を相対化することは、極めて重要です。

伊藤博文は、藩金を横領して英国に渡りましたが、英国の強さ＝卓越性に仰天し、それは、キリスト教という強い一神教があるゆえと知ります。帰国すると、比喩的な意味の天皇現御神（あきつきかみ）という思想を変形させて、天皇を文字通りの生きている神＝現人神（あらひとがみ）とする疑似一神教をつくりました。師の吉田松陰に深く影響された「禁じ手」の国家宗教です。

天皇教は、現実政治の中で凄い力をもちました。人間も世界も超越した神という概念ではなく、日本国の主権者であり、軍隊の統帥権をもつ一人の男性が絶対的な存在＝「神」となるのですから、人々は神である天皇と向きあい対話することになりますが、それでは、世俗の価値を超えて思考するどころか、世俗の価値（天皇の意思＝政府が要請する考え方）をそのまま絶対のものとし、従うことになります。自分と国家は一つになり、忠の精神（上下倫理）こそ最高の道德であると信じる精神がつけられたのです。忠臣蔵、忠犬ハチ公など「忠」は日本独自の優れた倫理とされました。

話を戻しますが、世俗の価値意識を超えた思考は、超越神への信仰がないとできないかと言えば、それは真っ赤なウソです。そもそも、紀元前の実存思想は、超越神を持ちません。

私たちの意識は誰であれ二重化していて、私の言動をもう一人の私が見ています。私という自我を吟味する私の意識がありますから、そこで自問自答ができるのです。そのためには、意識を自由に羽ばたかせることが条件ですから、空を見るなど視線を遠くにする習慣が必要です。ソクラテスを生んだエーゲ海文明も、ブッダを生んだネパール・インド文明も共にアーリア人と現地人の混血ですが、アーリア人たちは青空を神にしたと言われます。青空、白雲、星空を眺める習慣をもつと、自分で自分に聞いてみる、という作用がよく働くようになります。自己相対化は、一神教を信じる事とは関係がありません。

21世紀に求められるのは、唯一神への信仰という一神教やその亜流の西欧思想ではなく、古代の実存思想に学ぶことです(中世日本の親鸞や20世紀フランスのサルトルの思想とも重なります)。それを現代に活かす「恋知」(れんち)という発想や態度が未来を開くキーになるはずです。人間みなの特等性と自由に基づく寛容で楽しい社会をつくるには、共和制へのスムーズな移行が必要、わたしはそう確信しています。集団同調主義ではなくドライな強権でもない、水の国=日本にふさわしいのは、柔らかくしなやかで開放的、芯の強い共和政治です。

※「恋知」とはフィロソフィーの直訳語ですが、恋知第2章「恋知とは何か」その他はネットで見るができます。

2019年 2月 21日 武田康弘



(撮影 2018年5月 66歳)

2. 人類思想の三分類と恋知

「儒教・儒学」、
「ソクラテス・ブッダ・老子の実存思想」、
「キリスト教・イスラム教などの一神教」と
「恋知」

2. 人類思想の三分類と恋知

「儒教・儒学」、「ソクラテス・ブッダ・老子の実存思想」、 「キリスト教・イスラム教などの一神教」と「恋知」

わたしは、神は唯一なり、神は実在する、神の声、神に従う、などという一神教は、嫌いというより、困った思想であると思っています。

その絶対神=超越神を真似て「疑似一神教」(天皇現人神)をつくった伊藤博文ら明治維新の過激派の思想は、愚かで危険だと見ています。少なくとも民主主義の常識から見れば、異様な思想であることは明白です。

こういう異様な心=何かに憑りつかれた精神に陥ることのないように注意し、生き生きと自由で健康な精神=自己判断能力を育てようとするのが、現代の教育の基本的な使命であることは間違いありません。



では、現代にまで影響を与えている**人類の三つの思想**について概観してみましょう。

歴史的に一番古いのは、紀元前6世紀に現れた孔子です、それは儒学となり、その流れは、朱子学や陽明学を生みました。陽明学の実践・行動重視の考え方は、+にも-にも働き、最近では盾の会をつくり市ヶ谷自衛隊駐屯地で割腹自殺した三島由紀夫を支えました。

元々、孔子は、当時すでに崩れていた「君主政治」を理想と考えていました。君主政治に戻すべきと考えていた孔子は、**君子に仕える者の道徳**、生き方・考え方をつくりました。『論語』として知られていますが、それは、含蓄に富む言葉や普遍的なよきものに通じる思想も持ちますが、全体としては、**上位者に仕える人間の生き方**を示しています。日本の明治維新の尊王思想(天皇現人神)を支えた水戸学も儒学です。上下意識の厳しい封建道徳であり、《人間存在の対等性に基づき互いの自由を認め合う》という民主主義の社会には適合しません。

しかし、いまなお力をもつのは、会社や学校や運動部などで**民主化が遅れていて**、封建的あるいは全体主義的な組織運営が根強く残っているからです。日本文化が、「形と序列」の二文字で収まるのも、儒教・儒学の深い負の遺産と言えましょう。



次には、孔子に遅れること80年、**世界の三か所で誕生**したのが「**実存思想**」です。紀元前5世紀にエーゲ海沿岸のアテネに生まれたソクラテス（BC469年）と、インド（ネパール）に生まれたブッダ＝釈迦（BC463年中村元説）と、中国に生まれた老子（BC320年頃）。ここで詳しく説明はできませんが、異なる点はありません。みな、人はどのように生きるか、を国家とか全体の都合で考えるのではなく、一人ひとりの心の真実から立ち上げた思想として重なります。

絶対とか厳禁という考え方とは無縁で、誰かに従うのではなく、各自の思考力と対話により優れた考えを導くという**ディアレクティケー（問答法）**により普遍的（自他ともに深く納得できる）考え方を目撃したのがソクラテスです。

人はみな唯我独尊として生まれてきたというブッダ（釈迦）は、すべては縁により起こるという真実を明らかにし、究極の拠り所は自分であり法則である（**自帰依—法帰依**）という根本思想につき、慈悲に満ちています。

ソクラテスの思想とブッダの思想は、親近性を持ち、基本思想が重なります。それは、両者ともアリア人と現地人との混合・混血の上に成立しているという事情によるのでしょうか。生年も数年しか違いません。両者の死後、**紀元前3世紀にはギリシャ王たちと仏教者とは盛んに交流をもち**、多くのギリシャ王が仏教に帰依していますし、内容豊かな対話も残されています。超越的な「神」という概念

を持たず、人間の思索の力を信頼して対話をする両者は、知恵の協奏といえます。

中国の老子は、無為自然を keyword に、差別や権力的な人間関係を大元から断ち、女性原理につくことで平和をつくる**エコロジーとフェミニズム**の深い思想を展開しました。これら三者は、みな、異なる一人ひとりの人間性を深く肯定し愛する思想で、もっとも根源的な【**実存思想**】と言えます。



最後は、**唯一神への帰依**を説く**キリスト**（神の子）であり、その弟分として生まれた**ムハンマド**（神の教えを伝える者）です。この二つの世界的な兄弟宗教は、ユダヤ民族の国家宗教である「ユダヤ教」から生まれたものです。ユダヤ教の宗教改革として生まれたのがキリスト教であり、その弟分がイスラム教です。この二者の近親憎悪の激しさは、戦い（殺戮・略奪）の歴史＝十字軍の長く凄まじい宗教戦争として有名です。

言うまでもなく、絶対神（創造神）に従い信仰するという思想と、上記の実存思想とは、根本的に異なる考え方です。

キリスト教会は、ギリシャ哲学を換骨奪胎することで膨大な神学体系をつくりました。スコラ哲学と呼ばれますが、その改革として出てきたのが17世紀のデカルトに始まる近代西ヨーロッパ哲学です。西欧の学問を明治に直輸入した日本では、哲学といえば、この思想を指しますが、それでは一面的な思想の見方になります。神学の改革としての哲学と言えども、デカルトは代表作の「方法序説」の二部では、神の存在証明を書いているのです。

近代西欧哲学は、本質的にキリスト教の世俗化としての理論体系ですので、スコラ哲学がめがけたもの＝**人間存在と世界の全体をトータルに解明し叙述しようとする意思**を受け継いでいます。そのために、理論は複雑で難解となる宿命をもち、言葉の構築物としての論理の体系となり、カントからヘーゲルに至るドイツ観念論でピークに達しました。人間存在と世界の全体をトータルに解明し叙述するというのは、宗教の宣託のようなものでない限り出来えない不可能事ですが、その出来えないことの努力を続けたのが西欧の「近代哲学」だとも言えます。その歴史は、**20世紀最大の哲学者といわれたハイデガーが1966年に行ったシュピーゲル対話で幕を閉じた**と言えるでしょう。

シュピーゲル対話では、ハイデガーは、哲学にはもはや何も期待できないと言い、

従来の哲学の地位はサイバネティクスが占め、諸科学が哲学の替わりをする、と主張しました。哲学は無力だと繰り返し述べ、われわれ人類にできることは、何百年後かに現れる「神」のようなものを待つだけだ、と言いましたが、これは、**ハイデガーの存在論**（人間と世界のトータルな解明）の挫折であり、「**哲学の敗北宣言**」と言えます。

晩年、西欧哲学から離れた彼は、日本の親鸞思想に心酔しました。

17世紀に始まり20世紀に終わったのが西欧近代哲学と言えますが、この西欧哲学（キリスト教という一神教がバックボーンにある）は、ルネサンスの運動で明らかのように、古代エーゲ海文明への憧れに端を発していて、ギリシャのフィロソフィー（恋知）を換骨奪胎してキリスト教神学をつくり、その上に乗ったものでしたから、相当な無理の上に建てられた思想（形而上学）の建造物であったわけです。

わたしの提唱する《**恋知**》とは、一人ひとりの感じ・想い・考える営みを活発にすることで、意味充実の生が目がけるものです。誰の心にも先天的に備わっている善美へ憧れ心と真実を知りたいという心を不動の座標軸とする生き方ですので、二番目の実存思想と重なります。ソクラテスやブッダや老子に学ぶ温故知新の営みで、日々を支え、未来へ向けて開かれた考え方ー生き方の原理です。

わが国の宗教である仏教と「恋知」は思想の土台は同じなのですが、ただし、色合いはかなり異なります。

「恋知」という発想は、現実的で能動性が強く、開放的で明るいのです。子どものよさに学ぼうとする発想がいつも元にあります。いわゆるネオテニーという人間の特性の顕在化です。

また、とても重要な違いは、性に対する考え方です。「恋知」は、ソクラテスの思想（「饗宴」「パイドロス」）と同じで、恋愛を人間の人間的な生の象徴として捉え、よきものとして肯定します。ソクラテスは、エロースという性愛を含む恋愛への情熱を、善美や真実を求める動力源と考えますが、「恋知」も同じく、人間の自然性を尊び、真剣や真面目も、堅苦しいものとしてではなく、それらを、恋愛における態度と同じものとしします。更には、老子の思想は、女性原理であり、女性の悦びのために性の解放を謳います。

次に「恋知」と公共性について簡潔に記します。

恋知という実存思想は、公共哲学を支える「主観性の知」として提示されている通り（[金泰昌と武田康弘の哲学往復書簡](#)）、公共性を持ち社会に向けて開かれていて、特定の階層による政治や国家主義に対して、明確に否と言ひ、市民の市民のための市民による自治政治＝民主性・民主政・民主制につきます。平和への希求を強くもち、直接攻撃を受けたのではない限りは、あらゆる武器使用と戦争に反対します。

人間の生まれによる上下意識も元から排し、分かち合いという倫理につきますが、これらは、ブッダの思想と重なります。知識や履歴や財産の【所有】の多さに価値を置かず、【存在】そのもののよさ＝魅力に価値を見ます。他との比較・競争主義を排し、納得を原理として、誰もがそれぞれの輝き＝魅力を発揮できるような思想の態度です。その実現のために、格差を生まない法と制度に基づく自由主義経済を求めます。

わたしは、もちろん、宗教者の考え方―生き方を否定はしませんが、こどもた

1979年～天体観望会

2015年第40回式根島キャンプダイビング（63歳）



2008年1月参議院での討論（55歳）

2014年 白樺教育館・新館落成10周年

ちに示すことができるのは、「実存思想」しかないと思っています。一神教を信じることを教えたり、上位者に仕える道徳を守れ、と教えることが「禁じ手」であるのは自明でしょう。わたしの40年以上にわたる教育実践は、上記の実存思想に基づいたもので、それは、心身全体による豊かな愛情と一体です。

恋知 第2章では、一神教ではなく、世俗主義でもない「健康な生き方」を提示しました。

わたしは、恋知2章で、人間の人間としての生き方・考え方の基本を書きました。その土台の提示と共にキリスト教の影響下にある従来の西ヨーロッパ哲学や社会思想への見方、学習の仕方や生活仕方などについての反省と新たな考え方を記しました。

それは、宗教とは異なる「恋知」という広義のフィロソフィーですが、それなくしては、囚われなく自信をもって思想に関連する領域（宗教であれ主義であれ）を検討することはできません。

とりわけキリスト教の強い影響下にある欧米の学問を直輸入した明治以降の日本では、学問に携わる人は、知らぬ間にキリスト教シンパに陥りがちですので、人間や社会の見方には大きな偏りが生じます。その歪みを正すには、一神教（唯一神）によらずに人間の人間的な生の土台が説得力をもって明瞭・分明にされる必要があります。

恋知という広義のフィロソフィーは、そのための基盤です。外部に超越的な「真理」を置かず、自分の心身と頭で感じ・想い・考える営みを座標軸とする生き方以外はないことの明晰な自覚は、何よりも大切です。その考え方に基づき日々を生きる「内発的な生」なしには、何事でも本質レベルにおける前進は不可能です。従来の思想の批判・検討もできません。

恋知という発想＝思想は、理論体系ではないですし、宗教性もありません。よき生の原理を踏まえて日々を生きること（実践）で、さまざまな領域でよきものを花咲かせる、という効果をもたらす態度です。知らぬ間に深く効きます。強い宗教（キリスト教や日本の天皇教など）や強固なイデオロギー（マルクス主義など）を必要としない自由でしなやかな生を可能とする原理、それが『恋知』です。

紀元前 5 世紀に誕生したソクラテス（アテネ）とブッダ（ネパール・インド）、老子（中国）、また、中世の親鸞（日本）や 20 世紀のサルトル（フランス）らの実存思想とも重なる人間性を豊かに開花させる思想です。



武田康弘 2018 年 10 月（66 歳）

孫のなな&れんの運動会で。
おんぶしているには、
わたしの知らない女の子（笑）。

3. 世界共通の暦 = 太陽暦は、
エジプト暦→ユリウス暦→
その補正.
(元号を公共の場で使うのは困る)

3. 世界共通の暦=太陽暦は、 エジプト暦→ユリウス暦→その補正. (元号を公共の場で使うのは困る)

現代に至る世界暦の最初は、4000年以上前にエジプトでつくられたものです(シリウスを観測する太陽暦)。1か月を30日として12カ月で360日、それに特別の休日5日を加えて365日としました。

エジプトの天文官は、365日だと約4分の1日分がズレていくことは承知していましたが、正式に4年に一度の閏年(うるうどし)を入れた暦は、だいぶ時代が下った紀元前45年に、ローマ共和国のユリウス・カエサルが制定しました。これが「ユリウス暦」です。

ただし、1年を365、25日(365日と四分の一日)としていますので、より正確な1年=約365.2422日とはわずかなズレが出ます(1年間で11分強)。それをユリウスによる制定から1600年ほど経った1582年に修正し、400年間に100回の閏年を97回に減らしました。ユリウス暦を修正したわけですが、これをカトリック教会は、ローマ教皇の名にちなみグレゴリオ暦としたのです。

グレゴリオというローマ教皇の名によって誤差修正を行い、ユリウス暦をキリスト教会の暦であるかのように見せるために名称を変えたのです。ユリウス暦はキリスト教とは無関係(キリスト生誕前)でしたが、ユリウス暦の修正とは言わずに、グレゴリオ暦という異なる名称にしたのは、ローマカトリック教会の詐術です。そういう事情で、現在の暦は「グレゴリオ暦」と呼ばれています。

なお、ADとは、ラテン語で、アンノドミニ(Anno Domini)の略です。これは「主の年に」という意味ですが、この言い方は、10世紀ころから欧州で使われはじめ、15世紀以降に一般化したものです。しかしイエス・キリストの誕生は紀元前4年ないし5年ころとされますので、生誕年とは一致しません。

19世紀以降は、世界暦であることをはっきりさせるために、ADではなく、

C E (Common Era = 「共通紀元」) に変える動きが広がっています。紀元前は、Before Common Era (BCE)。

元号を公共の場で使うのは非常識。

その国の王が死ぬと (あるいは退位すると)、時代名を変える。その国に住む人びとの時間感覚をいやでも王の名と結びつける。こういうシステム = 元号制度は、世界中でやめ、21世紀の今日に残っているのは、日本ただ一カ国のみです。

少なくとも **公や公共の場面** では、元号ではなく、世界暦にしないと、不便・不合理 (何年前か後かがすぐには分からない) のみならず、世界との共時性、通時性が得られなくなります。

また、何より天皇と結びつけた **元号の役所における実際上の強制** は、新憲法となり、国の主権者が天皇から国民に変わった戦後社会では、**明白に憲法違反です**。13条の個人の尊重、第19条の思想及び良心の自由、24条の信教の自由を犯すものです。

正しい暦=太陽暦は、エジプト暦→ユリウス暦→その補正.

4. 「元号は伝統」はウソ.

4. 「元号は伝統」は、ウソ。

中国にならった「元号」の制度は、「大化」（645年）にはじまり、二度の中断をはさみ、「大宝」（701年）から続きましたが、その伝統は、江戸時代と共に終わりました。

明治からは、元号は、一世一元という新しい元号制度により、「近代天皇制」と呼ばれる天皇中心主義国家のシンボルとなったのです。

国民に一世一元の元号を使用させることで、江戸末期まで民衆にはあまり知られていなかった天皇という存在を、日々、自然に意識させるのが、明治政府＝岩倉具視の目論見（もくろみ）でした。それは、見事に効を奏して、大化から慶応まで1200年あまりの日本の伝統を壊して作った「天皇現人神」という「国家宗教＝国体思想＝靖国思想」は、大きく深く日本人に浸透し、いまなおその呪縛から自由になれません。

一世一元の元号を日々使うことで、元号は、気付かないうちに、天皇や皇族という存在を日本人の意識の深層に入り込ませるという役割を果たしてきました。皆は、無意識領域まで侵されます。

江戸時代までの伝統の元号とは、大化（645年）から慶応（1868年）までの1223年間に244の元号ですから、一つの元号の平均の長さは、5年強です。天皇在位とは結びつかず、頻繁に変わる時代名でした。江戸時代では庶民は、時間を測る尺度にはならないので、干支（12年×5＝60年で一巡）を使っていました。

ちなみに、最初の「大化」は、4年8カ月。次の「白雉」も4年8カ月、「朱鳥」6カ月、「大宝」3年1カ月、「慶雲」3年7カ月です。

最後の江戸時代末は、「万延」11カ月、「文久」2年11カ月、「元治」1年1カ月、「慶応」3年5か月です。

※また、天皇という中国にならった呼び名は、天武(673年)が最初であり、平安初期の村上天皇までで、その後は800年以上の間「天皇」と呼ばれる存在は**ありませんでした**。天皇と呼ばれた一族は、実権を失い、京都のローカル王にすぎなくなったからです。

「天皇」の復活は、江戸時代後期の光格まで待たねばなりません。しかし、今日でも、今上(こんじょう)とか御門(みかど)などと呼称され、死後は「○○院」と呼ばれた存在もみな「天皇」としているのは、**明治維新による歴史の改ざん**のままです。明治政府の方針(日本の歴史は天皇の歴史という酷いウソ)にいまなお従っているのでは、あまりに愚かです。

武田康弘 2019-07-04 (2020-1-26 改定)

「元号は伝統」は、ウソ.

5. なぜいまも江戸城に？

付 1. 「ポツダム宣言」全文

付 2. お勧め本 = マンガ「日本人と天皇」

5. なぜいまも江戸城に？

天皇家は、薩長同盟による革命＝明治維新に利用され、同調し、利害を共有しましたが、それにより、まったく縁もゆかりもない江戸城に住む(住まわされる)ことになりました。150年前のことです。

明治天皇とよばれることになる睦人(むつひと)は、まだ15才にもならないうちに、伊藤博文や山県有朋らにより、京都御所から江戸城に連れて来られ、新たな「近代天皇制」(天皇は、神の系譜で神聖な存在であり、同時に国家の主権者)にふさわしい天皇になるべく教育されました。

その近代天皇制の70数年間は、日清戦争、日露戦争、朝鮮併合、第一次世界大戦、シベリア出兵、満州事変(満州国建設)から太平洋戦争までの15年戦争(まる14年間)と戦争の歴史でしたが、1945年8月15日に「ポツダム宣言」※を受諾し、9月2日に降伏文書にサインして、無条件敗戦をして終わりました。

主権者は天皇から国民へとコペルニクス的転回をして、大日本帝国憲法から日本国憲法に変わりました。昭和天皇は「人間宣言」をして現人神(あらひとがみ)ではなくなり、明治政府のつくった近代天皇制は、その大元の思想を否定されました。しかし、天皇家は、いまだに徳川家の城に住んで(住まわされて)います。

天皇家の住まいは京都御所であり、東国の江戸城とはまったく縁がありませんでしたので、ほんらいならば、戦後の新憲法発布後は、京都御所に戻る(戻らせる)ことが必要でした。いまなお江戸城に住み続ける(住まわせ続ける)天皇家では、日本の伝統に反してしまいます。



(2020. 1.30 武田)

わたしたち国民とその意思の代行者である政府、当事者である天皇家の方は、よく考える必要があります。いつまでも他者の城に住む（住ませる）のでは、道徳的にもよいとは言えません。伝統文化の象徴である天皇家は、それにふさわしい京都御所があるのですから、それとは無縁の東京に住み続けるのには無理があります。明治政府による伝統の破壊を超えて、日本にふさわしい天皇家とするためにも、ほんらいの住まいに戻ることが必要です。

※「ポツダム宣言」は日本への最後通告でしたが、昭和天皇も外務省も政府も軍部もみなこれを無視して返答をしませんでした。その結果、原爆投下が現実となったのです。

ポツダム宣言は、戦後の日本にとり最も重要な文書ですが、驚くことに、安倍首相は国会で「つまびらかには読んでいない」と答弁しています。以下に全文を載せます。

『ポツダム宣言』（米、英、華三国宣言）

（一九四五年七月二六日「ポツダム」において）

一、 われわれ合衆国大統領、中華民国政府主席および英国首相は、数億人の国民を代表し、協議のうえ、日本国に対し、今回の戦争を終結する機会をあたえることで意見が一致した。

二、 西方から陸軍および空軍による数倍の増強を受けて巨大になった合衆国、英帝国および中華民国の陸海空軍は、日本国に対し最後の一撃を加える態勢を整えた。この軍事力は日本国が抵抗をやめるまで、同国に対し戦争を行なっているすべての連合国の決意により支持され、かつ鼓舞されているものである。

三、 立ち上がった世界の自由な人民の力に対する「ドイツ」国の無益かつ無意義な抵抗の結果は、日本国国民に対する先例をきわめて明白に示すものである。現在、日本国に対し集結しつつある力は、抵抗する「ナチス」に対してもちいられたときに、すべての「ドイツ」国人民の土地、産業および生活様式を荒廃にいたらせた力に比べ、はかりしれないほど強大なものである。われわれの決意に支持されたわれわれの軍事力の最高度の使用は、日本国軍隊の不可避かつ完全な壊滅を意味しており、また同時に日本国本土の完全な破壊を意味している。

四、 無分別な打算により日本帝国を滅亡の淵に陥れた身勝手な軍国主義的助言者によって日本国が引きつづき支配されるのがよいか、または理性の道を日本国が歩むのがよいか、日本国が決める時が来た。

五、 われわれの条件は以下のとおりである。

この条件からの逸脱はないものとする。これに代わる条件はないものとする。
遅延はいっさい認めない。

六、 われわれは無責任な軍国主義が世界より駆逐されるまでは、平和と安全および正義の新しい秩序が実現できないことを主張する。したがって日本国の国民をだまし、彼らに世界征服の拳に出るといふ誤りを犯させた者の権力および勢力は、永久に排除されなければならない。

七、 そのような新しい秩序が建設され、また日本国の戦争遂行能力が破壊されたことが証明されるまでは、連合国の指定する日本国の領土内の諸地点は、ここで指示する基本的目的の達成を担保するため、連合国が占領するものとする。

八、 「カイロ」宣言の条項は履行されるべきものとし、日本国の主権は本州、北海道、九州および四国ならびに、われわれの決定するいくつかの小島に限定される。

九、 日本国の軍隊は完全に武装を解除されたあと、各自の家庭に帰り、平和的かつ生産的な生活を営む機会を得ることを許される。

十、 われわれは日本人を民族として奴隷化しようとしたり、または国民として滅亡させようとする意図をもっていない。しかし、われわれの捕虜を虐待した者をふくむすべての戦争犯罪人に対しては厳重な処罰が加えられることになる。日本国政府は日本国国民の間における民主主義的傾向の復活強化に対するすべての障害を排除するものとする。言論、宗教および思想の自由ならびに基本的人権の尊重は確立されるものとする。

十一、 日本国はその経済活動を維持し、かつ公正な実物による戦争の賠償の取り立てを可能にするような産業を維持することを許される。ただし、日本国が戦争のための再軍備を行なうことができるような産業はこの限りではない。こ

の目的のため、原料の入手（その支配とはこれを区別する）は許可される。日本国は将来、世界貿易への参加を許される。

十二、前記の諸目的が達成され、かつ日本国国民の自由に表明する意思にしたがい平和的傾向をもち、かつ責任ある政府が樹立されたときには、連合国の占領軍はただちに日本国より撤退するものとする。

十三、われわれは日本国政府がただちに全日本国軍隊の無条件降伏を宣言し、かつその行動における同政府の誠意について、適当かつ十分な保障を提出することを要求する。これ以外の道を日本国が選択した場合、迅速かつ完全な壊滅だけが待っている。

（日本語訳は『戦後史の正体』孫崎 享著の巻末資料より。太い色字は武田による）

お勧め本＝マンガ「日本人と天皇」 全体象＝事実と意味を知ろう！

天皇の歴史書＝日本書紀に書かれていることを知っている人は、意外と少ないようです。

戦後の象徴天皇という規定がどうして誕生したのかもあまり知られていません。

何も知らないで(明治政府がつくった神話を信じ込んで)天皇を有り難がるのは変ですので、天皇について俯瞰して見る必要があります。

マンガ「日本人と天皇」は、分かりやすく事実と意味が学べますので、とてもお勧めです。マンガだけでなく、説明文もあります。

マンガ「日本人と天皇」(新装増補版) 2019年4月 雁屋 哲原作

いそっぷ社刊



なぜいま江戸城に？

6. 志賀直哉の言葉 天皇という記号

「天皇とは奇妙なもの、
単に無形の名らしい」

6. 志賀直哉の言葉 天皇という記号

「天皇とは奇妙なもの、単に無形の名らしい」



鋭利な感覚神経と強い直観力をもつ白樺派※の志賀直哉は、「小説の神様」と呼ばれましたが、大学時代のノートに以下のように記しています。1906年（明治39年）、23歳の時です。

「天皇とは一体なんだろう？ どうして何の為に出来たのだろうか？ 誠に妙なものだ。こんな奇妙なものがなければならぬのかしら？ 天皇というのは恐らく人間ではあるまい、単に無形の名らしい。その名がそんなにありがたいとは実に可笑（おか）しい その無形の名の為に死し、その為に税を納めて。その名の主体たる、一つの平凡なる人間を及びその一族（交際する事以上何事も知らぬ。交際せんが為に生まれて来た人間）をゼイタクに遊ばせて加えてそれを尊敬する、何の事か少しも解らぬ、そういう人から爵位をもらって嬉しがる、嬉しがって君のためなら何時でも死す、アア、実に滑稽々々（こっけい こっけい）。・・・・・・・・」志賀直哉全集 補巻5（岩波書店2002年刊）21～24ページ

奇妙なもの 人間ではあるまい、単に無形の名らしい。

という言い方は、さすがというほかありません。文学者の鋭い直観力で、見事にひとことで近代天皇制の本質を穿（うが）っています。中身・内容のない単なる「名」であるゆえに、「形」も定まらない。だから、人間ではなく、単なる無形の名に過ぎない というわけです。

天皇とよばれる人は、その人固有の性質をもった一人の人間(実存)ではなく、明治政府によって作られた近代天皇制というシステムにはめ込まれた人で現人神（あらひとがみ・生きてる神）と規定されました。

これは、吉田松陰が、後期の水戸学や国学を用いて作りあげた【天皇教という国家宗教(国家神道)】で、そのイデオロギーに感化された長州藩の若者(下級武士)たちの過激な思想と暴力を支えた「主義」でした。

したがって、天皇というのは、個性をもった一人の人間ではなく、「単に無形の名」なのです。現代の言葉でいえば、「記号」です。記号化された人間ですから、**奇妙なもの**、であるわけです。**気の毒**とも言えますが、その名により、数々の戦争や残虐が行われたのですから、評しようもない話です。

「記号学」という学問は、政治に利用され、人々を特定の方向に導くための研究に使われたりもしています。電通などの大手皇国代理店ではなくて（笑）広告代理店において企業や政党（自民党など）のCMづくりに用いられます。人間は、ある言葉や動作、儀式や空間、音や音楽などを見聞きしたとき、自動的に脳は、さまざまなシンボルをつくります。そのシンボルをもとに思考は進みますので、記号学では、どのような言葉や儀式や空間や音をつくれば、特定のシンボルを脳内に生じさせることができるかを研究します。イメージの世界を支配する方法とも言えます。

わたしたち日本人は、明治政府が考え決めた「一世一元の元号制度」（明治以前にはなかった新制度）により、日々、自動的に天皇と一体となっている時代名を使います。わたしの生まれは、昭和〇〇年で、今年の5月からは令和元年、平成という時代は云々だった、と言いますが、ほんとうは、時間がブツギレになり、まるで物の存在のように実体化されるのは、おかしな話です。日本だけに固有の時間一時代がある、というわけですが、そういう意識を生じさせるのは、元号という記号のおかげ！です。そこから、「日本人」という特別の存在がある、という思いも生まれます。

あまたの記号で、日本最大のものが、「天皇」という言葉でしょう。即位の礼と大嘗祭という儀式を行い、天皇という役を担うことになると、**個性をもった一人の人間は天皇という記号へと変わります**。この記号は、おそろしいまでの力を放射し、**日本人は、この言葉＝記号を聞くと完全な思考停止になります**。天皇という概念や天皇制について考えることはタブーとされ、マスコミも天皇制の検討は一切しません。人々は、**この記号により無意識領域まで管理されてしまい、思考は無となります**。

では、なぜ、天皇という記号が、これほどまでの威力をもつことが可能なのでしょうか。

それは、天皇教という儀式宗教が、内容をもたないからです。特定の内容は

なく、三種の神器という秘密めいた品があり、万世一系という神話（もちろん真っ赤な嘘）があり、さまざまな秘密の儀式があります。天皇は1年間に200以上の儀式を行い、その多くの核心部分は秘密です。このようにたくさんの儀式があり、中身はないのが天皇教の特徴です。というより、中身・内容は、その時々世俗の価値で、それを絶対化する役割をしています。

内容・中身がない（世俗価値の肯定）ですから、批判のしようがなく、対立もおこりません。「型」＝「単なる無形の名」（名だけがあり内容を伴う形はない）があるのです。

厳かな仰々しい儀式があり、その儀式の型は、代替わり、死去、米の豊穰、安心・安全、及び紀元節の祝いや神武天皇を實在の人物とする儀式などですが、**儀式の真の目的は、天皇という記号の神秘性と権威性を示すところにあります。**天皇とは吟味・検討を許さない超越的な存在であるという想念を人々に浸透させ、有り難いものと感じるように導くわけです。内容は、その時々世俗の価値に合わせて変わりますから、戦前は**皇軍の顔**で戦争のシンボルでしたが、今は**平和の象徴**です。柔軟！？でなんにでもなれます。

「どのような言葉を使い、所作をし、儀式を行えば神秘性と権威性を高められるか」その追求に特化して生き延びてきたのが天皇家ですから、ずっと昔から記号学の実践的研究に取り組んできた家系といえるかもしれません。また、天皇家にしか使われない数々の特別な言葉＝敬語をつくることで、世俗を超越した天皇というイメージをつくり出し、無言のうちに人々に頭を下げさせます。さらに、戦後の象徴天皇制においては、親しみをつくる言葉や所作や行為を追求し、その基盤を強める努力もしてきました。

この方法はとても優れていて、上位者は、上位者であることを示せば、自然に勝てる仕組みとなりますから、日本ではみなが用いています。そのために、中身・内容の追求はおろそかになります。生き方の探求や実存の冒険がなく、わたし固有の意味充実の世界を拓く営為がひどく乏しくなります。**個々人から立ち昇る精神の自立がなく、組織の中で決められた役割を果たすのが人生の意味となるのです。**これは、人間管理の究極の形態と言えます。**内容は乏しくとも形式だけが立派**という生き方に誘導されます。

恋知（フィロソフィー）の営み＝実存としての生はありません。

明治政府がつくった近代天皇制は、いまもなお**象徴天皇制**として生き残っています。天皇という役を担う人の人権を奪い、その代わりに超がいくつもつく特別待遇をし、皇族と呼ばれる一族を縛り、一人の人間として生きる道を閉ざしています。思想や発言の自由はなく、参政権もなく、個人の尊重もありません。数々の権利がない分、義務もなく、多額の収入(すべて税金)はありますが、納税の義務は果たしません。天皇は国籍を持たず、苗字もなく、住民登録もなく、日本の法律(実定法)は適用されませんので、**法的には日本人ではなく、宙に浮いた存在**といえます。

こういう説明不能の天皇という存在が日本人全員を統合する象徴!? この理不尽なシステムを維持するには、永遠に「単に無形の名」である記号に頭を下げ続けさせる努力=染脳・占脳を続けるしかありません。この憲法1条の規定は、マッカーサー(GHQ)によりつくられたものです。



※**白樺派**とは、皇室の藩屏(はんぺい)としてつくられた学習院に学ぶエリート階層による文化運動で、大逆事件の起こった1910年に同人誌『白樺』は創刊されましたが、その特権ゆえに暗い世相に抗して、個人の価値と自由を高らかに宣言し、白樺山脈と呼ばれる日本最大の文化運動となりました。

「彼らの息吹を吸おうではないか」との理念の下に2001年1月に「白樺文学館」がオープンしました(わたしが全コンセプトをつくり費用は佐野力が負担)が、写真は、その時に私がつくった12ページのパンフレットの表紙です。発行5万部。

(なお、彼らは、学業成績は下位であった志賀直哉と武者小路実篤を含み皆が東大へ進学しましたが、当時は、文科ならば学習院から東大へは無試験だったからです)

なお、今の天皇制をどうするかについては、2017年にアイデアを出していますが（16～18ページ参照）、圧倒的な多数の方の賛同を得ました。もう一度簡単に要旨を記します。

まず、天皇を国事行為から解放して一人の人間としての人権を保障し、文化的行事への貢献者（传统文化の象徴）とします。そして、いまの数々の国事行為は、近代市民社会にふさわしい形に簡略化し、大統領（元首であり、政治権力はもたないが、首相の国会解散への拒否権はもつ）が行います。天皇制から共和制へのスムーズな移行です。

市民精神に基づく話し合いで、混乱なく天皇を「単に無形の名」から解放し、明治以前の日本の伝統に戻し、同時に現代にふさわしい自由な生活を保障するのは、日本の**名誉革命**（市民革命）になります。

住まいは、徳川家の城である江戸城ではなく、ほんらいの京都御所となります。それに伴い江戸城（皇居）は、公共の公園として国民みなのおアシスに変わります。首都東京＝千代田区の真中に自然がいっぱいの広々とした公園がある国は、世界に誇れる民主主義＝市民主権の国です。なんと素敵なことでしょう~~~~~

天皇教の呪縛から解放された国民と天皇家は、自由・平等・友愛の精神を現実自らものとし、生き生き伸び伸び、型ハメ、束縛、上下意識から自由になり、みなそれぞれ個性を大胆に肯定して生きる国へと変わる、というわけです。

天皇家にのみ伝わる宗教＝儀式をどのようなにするかは、最終的には天皇家の人々の判断です。簡略化したり、不要と思われるものを廃止したり、・・・それは、**信教の自由**で、天皇家の問題です。ただし、税金を用いるのは、日本国憲法に反しますから、不可能です。（**憲法第20条** 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。2. 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。3. 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない）

武田康弘

7. 天皇 system + ism は、
集団同調 ism を生み、
理性を育てません。

7. 天皇 system+ism は、集団同調 ism を生み、 理性を育てません.

武田 康弘

日本には、平安時代前期の村上天皇を最後として、江戸時代の後期に光格が再び天皇を名乗るまで800年以上の間、天皇と呼ばれる人はいませんでした。天皇は権力を失い、京都周辺のローカル王になったからですが、とりわけ鎌倉時代の承久の乱(1221年)で、仕掛けた側の後鳥羽院が完全敗北し、隠岐に島流しの刑となり同地で死去した後は、京都の西側までもすべて鎌倉幕府が治めることになりました(北条義時と姉の政子による)。法然門下の僧、親鸞などを死罪・流刑とした後鳥羽院は、自らが島流しとなり最期を迎えたのでした(左図)。



その後天皇家は細々と生き延びてきたのですが(権力欲に憑りつかれた後醍醐による南北朝の戦いは例外)、その存在は、明治維新が成立した後でも、とりわけ東国では天皇を知っている民衆はほとんどいませんでした。明治政府は看板に書いて広めなくてはならなかったほどです。

いまの天皇制は、明治維新の岩倉具視や伊藤博文、山県有朋らがつくった「近代天皇制」と呼ばれるものですが、それは、祭事(まつりごと)や武士の政治権力を聖化する儀式をして生家を立てていた一家の長を現人神(あらひとがみ・生きている神)として崇める政府神道(明治政府がつくった国家宗教)です。この政府がつくった宗教の総本山が「東京招魂社」(官軍側の死者だけを国家の軍神として祀る施設)でしたが、10年後に名称を「靖国神社」と改め、日本の伝統の神社でもあるかのように装ったのでした。

知恵者である岩倉具視(※)は、まだ民衆にはあまり知られていなかった天皇を知らしめ、意識させるために、新しい元号制度を考案しました。数年に一度変わっていた元号(天災が起こったり祝い事があると変えていた)を、天皇の存在と結びつけ、天皇と時代名を一致させる「一世一元」にしたのでした。これにより民衆は、いやでも天皇を意識するようになり、時代名として元号を使うことで



※元「文芸春秋」編集長で日本史の半藤一利さんと立命館 APU 学長で世界史の出口治明さんは、岩倉具視を「最大の陰謀家でやりたい放題」・「一番のワルで良心の痛みを感じない人」と書いています。『明治維新とは何だったのか』祥伝社 2019 年 5 月刊

時間感覚まで古代の王制のように支配され、天皇教として無自覚に心身に入り込むことになったのです。太平洋戦争敗戦までの明治憲法時代（主権者は天皇で現人神）も、敗戦後の新憲法時代（主権者は国民となり天皇は「人間宣言」をした）も、同じ昭和時代と呼ばれ、それを誰もおかしいとは思わないのですから不思議です。

敗戦で主権者が天皇から国民へとコペルニクスの転回をして民主憲法となりましたが、マッカーサー（米軍）の意向で、天皇は日本国民統合の象徴とされて残りました。これは、天皇を絶対視する日本人の心（明治以降の洗脳教育による）を利用して、統治をスムーズに進め、将来に渡り日本をアメリカの従属国とするために考案されたもので、「東京裁判」で天皇の戦争犯罪を免責して東条英機にすべて罪を負わせるストーリーとセットでした。

この象徴天皇制では、憲法 3 条にあるように、「天皇の国事に関わる行為はすべて内閣の助言と承認を必要とする」で、天皇に自由はなく、時の内閣に利用される仕組み＝構造になっています。皇族と呼ばれる人たちの人権は著しく奪われていますが、同時に驚くほどの特権を与えられています。

日本の国民＝人間を、天皇と呼ばれる人間が象徴するという「日本国憲法」第 1 条（マッカーサーによる）は、意味不明です。象徴（シンボル）とは、目にみえないものを見るもので表すのであり、人間を統合する象徴が人間だというのは、不可解で異様な話です。こういう役をやらされる人間は、ふつうに人間らしく振る舞い生きることができず、絶えず、なにかしらの典型であることを求められてしまいます。

天皇には、日本国籍がなく、住民票もないので、海外に行くにもパスポートは

発行されません（できません）。法律上は、日本人ではないのです。



3億数千万円の収入(すべて税金からです)がありますが、所得税も住民税も健康保険料も払いません。住居は、天皇家の住まいである京都御所ではなく江戸城ですが、これにかかる費用はもちろん別途税金です。また、天皇家の人々をお世話する宮内庁という役所の予算は180億円程度ですが、今年の代替わりの儀式にかかった160億円や葬儀にかかる費用（昭和天皇の場合は100億円程度）は、また別ですべて税金です。あちこちに土地や建物がありますが、それは明治政府の伊藤博文が国有地を天皇家の所有へと名義を書き替えたからで、天皇家とは無関係の財産です。

このほか、何から何まで特別待遇ですが、自由はなく、人権は奪われています。衣食住の雑事も付き人が行い、天皇家に伝わる200以上の宗教儀式をするのが日課です。このような存在に、無条件に敬語を使い、敬意を表すのは、なぜなのか、答えられる人は誰もいないでしょう。天皇について問うこと、問いを発するという哲学の行為をするのは、タブーとされていて、テレビも新聞も当たり障りのない話しかしません。恐ろしいまでに不思議な国です。天皇陵だと宮内庁が主張する場所は、調査研究が禁止され、主権者のはずの国民は真実を確かめられません。それを平然と通すのですから呆れます。

このように、日本では、疑いをもつこと、合理的に思考すること、理性（総合的判断能力）を発揮することが悪いことのようにされてしまいます。

技術の追求や、自然科学上の探求や、事実学の暗記（クイズの知）は、いくらでもできますし、それらが優秀なら高く評価されますが、「社会」や「歴史」や「人間の生」についての本質論・意味論は、喜ばれません。天皇制を前提にして天皇教的な心性をもてば、よし、とされますが、なぜ、どうして、何のため、と哲学的な問いを発し、実証的に調べたり合理的に考えることは嫌われます。単なる既存の知の体系としての事実学だけがあり、意味論や本質論の知（ほんらいは最も大切な知の中心と土台）がないのです。だから、昔から「日本に哲学(恋知)なし」と言われます。哲学までも、近代西欧哲学（17世紀のデカルトに始まり

～20世紀のハイデガーで終わった)の本を読むこと、その解説本を受験参考書のようにして記憶することですから、救われません。

大きなタブーがある国では、勢い、大元から考える、洗い直す、というほんとうに知的な作業を避けるようになります。そういう空気が蔓延してしまうので、理性(総合的判断能力)が鈍麻し、表層的な知(受験知・単なる事実学)を貯めこむ人間ばかりとなります。まるでクイズの知の勝者が優秀と言わんばかりになります。日本の基準(=東大が優秀とする東大病)でいえば、記憶力の弱いエジソンは、馬鹿でしかなく、学校の勉強が嫌いで成績はせいぜい中くらい、高校は落第し中退したアインシュタインは、落ちこぼれに過ぎません。

世界で最も有名な日本人作曲家・武満徹も高卒ですから、芸大卒の作曲家より下となります。こういう例は枚挙(まいきょ)に遑(いとま)がありません。根本的に考える人は受験知には向かないので、そうでない「優秀者」!?ばかりが優遇される国になってしまいます。

人間の生や社会のあり方と歴史について、理性的に考え、本質や意味を問うのは、とても大切なことですが、それが霧(もや)が立ち込めて明晰化されない天皇ismの精神風土は、困ったことです。土台が曖昧なのは、一人ひとりのよき生=内容の豊かなを生みだすことができなくなります。

国会の議員や内閣の大臣や裁判官も、コンビニの店員や芸人や学校の先生も、ノーベル賞受賞の科学者も、職業による差別はないので、みな「さん」付けでよばれますが、皇室の人だけは、赤ちゃんからお年寄りまでみな無条件で「さま」付けです。すべて敬語です。

【陛下】とは凄まじい言葉で、階段の上にいる天子=天皇に直接話すことはできず、階段の下にいる護衛を通さなくてはならぬという意味です。民主制とは二律背反の陛下という言葉が生きて使われる国は、大元から民主主義=主権在民とは無縁です。

小学4年生(弟)とお父さんの対話

「天皇ってなんで偉いの?」「国民の象徴だからさ」「象徴って何?」「シンボルさ、日本人のシンボルなんだ」「へ～、みんなの代表?選ばれたの?」「その家に生まれたからだよ」「そこの家に生まれると偉いの?」「うん、まあ昔からあつ

て、遺伝子が続いているからさ」「?? でも、みんな遺伝子が続いてるよ、続いていると僕もいないはず」「まあ、とにかく偉い家なんだよ」「????」

小学6年生(兄)とお父さんの対話

「社会の時間に憲法をやって、門地によって差別されないって書いてあったよ。門地は、生まれや家柄のことだって。皇室だけは特別なのはへんじゃない?」「明治のとき、政府が天皇家は神の系譜で、天皇は生きている神だとしたからさ」「ええ、そんなことほんとうに信じてたの?頭悪いね。それに敗戦して憲法が変わったのに、おかしいと思うよ。」「明治政府が日本の歴史は天皇の歴史だと決めたので、まあ、嘘なんだけど、それを今でも引きずっているし、保守の政治家は、そういうことにしておいた方が都合がよいと考えているんだよな。」「なんだか元からまちがっていると思うよ。」「でも、日本では、そういうことにして、頭を下げないといけなのさ。ノーベル賞の人も、天皇には頭を下げるだろ。理屈を言うと嫌われるのさ。」「????ずいぶん変な国に生まれたな~~~~、嫌だな。」

幕末、江戸幕府が鎖国をやめて開国することを決めたのに対して、天皇の意向を無視して開国を決めたのはケシカランと言いがかりをつけたのが、長州と薩摩の下級武士たちでした。彼らは、尊王攘夷(天皇を敬い外国を打ち払え!)を標語して江戸幕府を倒すために戦争(内乱)を仕掛けて勝利したのです。もちろん、その後は、攘夷から開国へ転回したわけです。



★最大の陰謀家と言われる岩倉具視(写真)は、公家の出身。

田舎の武士たちによる政権は、自分たちの権力を正当化するためには権威が必要なので、後期の水戸学や国学により天皇家を利用して天皇教をつくり掲げたのでした。「現御神」(あきつきかみ)という比喩的に使われていた言葉を「現人神」(あらひとがみ)と変えて、文字通りの「天皇は生きている神」という思想をつくり、それに合わせて、学校では、「日本の歴史はずっと天皇が中心であった」という染脳・占脳教育が徹底されたのです。日本は世界に一つの神の国となりました。

その戦前思想を復活させることを宣言しているのが、安倍首相の親友で政府

の各種諮問機関（教育改革や皇室問題）の委員を務める八木秀次麗澤大学教授です。彼は「大日本帝国憲法」を讀える『明治憲法の思想』（PHP新書）や欧米のつくった人権思想は間違（まち）がいたとする『反人権宣言』（ちくま新書）を書いて、戦前に文部省が強力に推し進めた国体明徴（こくたいめいちょう）運動の思想（「個人」と「人権」への嫌悪と否定＝日本は血族国家であり天皇陛下が中心）復活させるべく努めています。それが「日本会議」の思想で、このメンバーである自民党や維新の会の政治家は、それを文部行政の場に活かそうとしています。皇室への敬愛と愛国心を植え付け、躰を厳しくし、戦前の家族中心主義を復活させることを目指します



八木秀次の著作は、戦前の「国体明徴運動」の焼き直しで、「個人」と「人権」の概念を激しく攻撃しています。

明治政府が拵（こし）らえた近代天皇制は、思想としては稚拙（ちせつ）ですが、国家権力をフルに用い、一世一元の元号制度などを新設し、学校教育で小学1年生からの天皇制の刷り込み教育により、おそろしいまでの威力を発揮しました。しかし、それは、一人ひとりの精神的自立や自分の思想を育むことを元から疎外し続けてきました。今でもなおその負の遺産は清算できずにいますので、日本人の【思想音痴】はますます進んでいます。イデオロギーがフィロソフィーの代りをするのが日本文化です。

戦前は、生きる意味や価値は、自分で考えるのではなく、国＝天皇が定めたのです。滅私奉公、公＝天皇への奉仕と恭順と愛をもって臣民の一人として上位者に従って自分に与えられた仕事に精を出す、というわけです。「教育勅語」や「軍人勅諭」に集約された思想です。天皇を頂く政府に反対する者は非国民とされ、警察（特別高等警察）により弾圧されました。天皇への不敬罪や治安維持法で逮

捕された人は数十万人にのぼり、1600名ほどが殺されました（獄死は400名余り）。そういう反民主的な政策で思想を取り締った政治家や官僚の子孫が、今も政治の中心にいるのですから、本音では戦前の反省などしません。非道徳この上ない話です。

敗戦後の新憲法下の今日でも、天皇という言葉＝記号は、人々の意識を鈍麻させ、催眠術のような力を持ち続けていますが、それは、明治政府がつくった「近代天皇制」（天皇を現人神とする国体主義—その象徴が靖国神社）を思想レベルで検証批判し、新たな人間性豊かな思想を生み出す営みにひどく不足するからです。個々人の存在に立脚する【実存思想】と楽しい公共社会＝市民国家をつくる【公共思想】を生み出すフィロソフィー（恋知）の営みがなく、政治のイデオロギー次元の思考しかないことが、一番の原因です。個々の事象だけが問題となり、総合的判断能力＝理性が曇らされてしまうからです。



古代の【実存思想】 それによる【公共思想】

紀元前5世紀のソクラテス（ギリシャ）とブッダ（インド）、紀元前4～3世紀の老子（中国）

社会の中心に天皇というタブーをおき、こどもたちの素直な疑問にきちんと答えられないような国は、不健全・不健康というほかありません。社会について、国のありようについて、タブーをつくらずに自由に考え、発言し、対話することがなければ、ほんとうの前進もなければ、問題の解決もありません。【差別を制度化している国】を続ければ、個々人の理性（総合的判断能力）は失われ、個別の事実情報の集積と技術知と趣味の領域における思考のみとなります。人間が人間としての豊かさを開発し、新たな人間性のよろこびと意味充実の生をつくることは不可能です。



理性が靄（もや）に包まれて鈍麻したのでは、どれほど事実学を積み上げ、どれほど情報を収集しても、人間の生きる意味・価値に資することはありません。あふれる《人間愛》と広がり深まる《理性》に欠ける国、技術知と情報の暗記とパターン化した知を仕込む国では、いつまでも「人間を幸福にしない日本というシステム」（ウォルフレン）が続いてしまいます。人間性豊かな知が育たないのです。

大きなタブーをなくすことは、みな幸せをつくるために何よりも必要ですが、天皇 ism=天皇教という宗教を知らずに身に付けてしまう日本というシステムの内に生きている私たちにとり、まず何よりも重要なのは、その自覚・意識化です。

生まれた時から、元号で誕生年と呼ばれていて（昭和〇〇年生まれ、平成〇〇年生まれ）、親族が亡くなった年も元号で言われ、墓石も元号表記ですから、いやでも天皇教=元号教の中に閉じ込められます。明治維新のつくった「一世一元の元号」という宗教は、日本が天皇中心国家だということを無意識領域にまで刷り込みます。天皇の死・退位によりまた1年=元年に戻るという不合理極まりない時間管理（役所は元号を強要）には呆れますが、天皇≡元号の時間と時代を生きているのが世界で唯一の人々=日本人というわけです。

冷静に日本人と日本社会を見れば誰でもが分かりますが、見事なほどすべて「形と序列」です。その二文字ですべてが収まり説明できてしまうのは、笑えるほどです。一人ひとりの関心やよろこびから出発せず、中身・内容が膨（ふく）れて形となるのではなく、自由で豊かな想念が広がるのでもなく、固い形式と上か下かの序列意識に縛られて生きています。日本という国は「天皇教=東大病=官僚主義」の三者一体による支配だとするのは、以前からのわたしの見方ですが、わたしの大学クラス（ソクラテス教室・大学クラス in 白樺教育館）の生徒であった参議院調査室の荒井達夫さんは、この指摘に感動して、「・・・武田さんは哲学的にさらに深く鋭い分析を行っている。ここまでキャリアシステムの問題の本質を明らかにした説明は他には存在しないと思われる」と『立法と調査』（[2](#)

[97. 2009. 10参議院事務局刊](#)) に書いています。

こういう生き方は、天皇教的心性によるものと命名するのがピタリですが、では、[天皇教とはいかなるものか](#)を見ていくことにしましょう。

自覚的な宗教者ならば、例えば、「わたしはクリスチャンで、聖書を拠り所にして生きています」と言いますが、天皇教には経典はなく、あるのは、最初に天皇を名乗った天武（在位673年～689年）が、自らの支配と権力の正当性を主張するためにつくらせた「日本書紀」だけです。



天皇教とは、儀式だけがある「型」の宗教で、特定の中身はなく、その時々都合で変わり、世俗の価値を中身とするので、【世俗価値（世間価値）を絶対化する宗教】と言えます。よく言えば柔軟で何にでもなります。中身がなく仰々しい儀式で神秘的なムードを演出して、人を従わせる宗教ですから、日清日露から第一次世界大戦、シベリア出兵、中国侵略（満州国建設）から対米戦争に至る70数年は皇軍＝戦争の顔・象徴であり、敗戦後は戦争放棄＝平和の顔・象徴となります。昭和天皇の裕仁は、一人で両極端の二役をしたわけです。

繰り返しますが、天皇教は、形だけで中身はその時々世俗の価値を肯定するだけですから、抵抗感が少なく、知らずに深く意識を犯されて、無自覚に世俗価値を絶対化する世俗主義者＝天皇教者になります。これでは、永遠に「私の精神の自立」は育ちません。理性なき人間の誕生です。

このように世俗価値をそのまま肯定し、さらに絶対化する役目を果たす宗教は、[世俗の成功者を讃え、偉いものとします](#)ので、[批判者ははじめから排除](#)です。この排除と差別の文化は、左右を問わず政治家に端的に表れていますし、こどもたちの文化にさえなっています。金や権力や肩書や学力における「エリート」以外の人間はカスですし、権威や権力（肩書のある人）への批判者は疎まれ、冷遇されます。

ほんとうは、厳しい批判がなければ、人間も社会も窒息してしまうのですが、

それを知らないのです。街をゆく人も電車の中の人もみな灰色で、希望のない顔をしています。近視眼的で遠くを見る目をもたず、輝きも艶もありません。輝いて見えるテレビの芸能人は、ミカンにワックスを塗ったような外面の艶で、内側＝精神のパワーからくる健全な美ではありません。つくりもので、見事なまでの型の文化です。

超越性の原理をもつ世界宗教は、世俗の価値を相対化して、これでよいのか、を問います。世俗の利害損得や成功をそのまま肯定するのではなく、世俗価値を超えた視点からの洗い直し・問い直しをし、複眼的な視点をもつことで精神の世界をつくり、独自の見方＝人生を可能とする役割を果たしますが、天皇教はあべこべで、世俗主義ですから救われません。空気に合わせ、忖度する生き方しかないのです。みながそうだからわたしもそう（呆）。こういう集団同調主義（天皇教の別名）は、個人の内的なよろこび、輝きや色気を消し、灰色の世界しかつくりませんので、結局は世俗の価値を追い求め、挫折する人生（ごく一部はお金&肩書に逃げる人生）を歩み続けるほかないのです。【意味充実】の得られない堂々巡りで人生が終わります。

自らの考え方・生き方を反省し批判検討して、新しい人生を創造するという実存の生＝恋知の生は、天皇教の生き方とは全く異なる「わたしが輝く人生」ですが、それについては、2013年に「[恋知](#)」第2章に書きましたので、ぜひ熟読をお願いします。宗教者の生とも世俗教者（＝天皇教者）の生とも次元を異にする人間のほんとうの生き方です。超越的な真理を求める不毛性を知るとは、一神教に陥らない条件ですし、元号を使わずに世界暦（ユリウス暦を少し修正したグレゴリオ暦）を用い、皇族と呼ばれる人々を「さん」づけで呼ぶこと＝対等性を確保するのは、天皇教の呪縛から解放される条件です。

疑似的な一神教である天皇教＝世俗の価値に無批判に従う生き方ではなく、キリスト教などの一神教の超越性の原理でもなく、私の存在の内奥にある善美の座標軸を基にする恋知の生は、信仰でも〇〇主義でもありませんから、誰にでもできることで、少しも難しくありません。意識の二重性、自分の考えや行為を

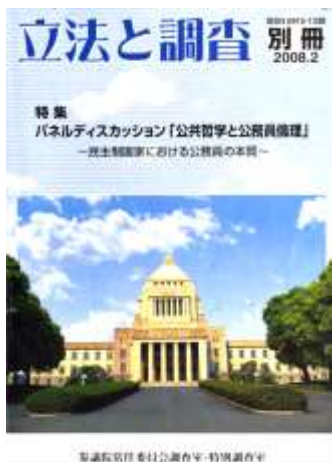


恋知を提唱する筆者

見ているもう一つの私の意識の声を聞く練習＝自問自答を基盤にして自由対話する生き方こそが、人間のもっとも優れた生き方と言えます。それは、特定の見方や宗教に囚われていなければ、誰でもすぐ始められます。

上位者からの要請でもなければ、立派な肩書をもつ人の上から目線（日本では左右とも肩書人は皆そうです程度が異なるだけ）のソフトな誘導でもなく、体系的な強い思想（一神教や西欧哲学史のお勉強による）でもない。染脳・占脳からは最も遠くにありながら、決して揺らぐごとのない意味充実の私の人生を可能にするのが、自分の具体的体験に基づき自分の頭で考えたことを交換・交歓・交感し合う恋知という実存の生です。それなくしては、人間の間人としての生は成り立ちません。**勝ち負けや利害損得を超えた「豊かな愛情+明晰な理性」**は生じないのです。

この恋知という発想と態度による実存の生こそが、優れて公共的な社会を生みます。**国民国家**（国籍にこだわり民族的共同体という幻想に依拠する）という狭隘な思想から、**公民国家**（シチズンシップに基づく市民的共同体による）という開かれた思想への転換によるのです。



筆者と金泰昌公共哲学編者と山脇直司東大教授および参議院調査室の荒井達夫によるパネルディスカッションを載せた『立法と調査』2008年2月別冊号

公民国家＝市民国家とは、わたしはこの国・社会をつくる主体者だという能動的な意識により、あなたとわたしの意思とお金(税金)を出し合っ

てつくるものです。主権者であるあなたとわたしを超えた存在はありません。超越者や絶対者はいないのです。これがほんらいの民主制度であり民主政治であり民主性の社会です。官とは、市民的公共に奉仕する組織であり、それと異なる言動はできません。

このわたしの思想一論考は、[恋知第3章『民主制・公共思想』](#)に記しましたが、これは、わたしと金泰昌（※東大出版会のシリーズ『公共哲学』

20巻の最高責任者) および山脇直司東大教授との討論に端を発し、東大や千葉大等での公共哲学運動と深く関係したもので、参議院調査室を舞台に展開された公共哲学論争の顛末と結語を記したものです。[白樺教育館のホームページ](#)でも読むことができます。(※最初の10巻は東大総長の佐々木毅さんと金さんの共同編集)

では、どのような社会・国をつくるのがよいか。その骨子は、すでに2017年にfbやBlogで発表しています。16~18ページに載せてありますので、ごらん下さい。

中身・内容を見、聞き、感じ、考えるという知り方ではなく、形式・名前で自他を判別するような人間であっては、人間性のよさ=魅力に乏しい「肩書人間」に墮ちます。それでは、【人権】という最も大切な価値を知ることはできません。外面(そとづら)人で、心身から湧き上がる人間愛と全体を見て意味を捉える理性に欠ける人になるからです。形式と序列の人生をやめなければ、日本人は永遠に不幸です。モノ、カネ、カタガキしか分からない愚かさから抜け出て、実存者(恋知の人)として生きることを貫き通しながら、妥当性の高い公共社会(公民国家)をつくるのです。イデオロギーではなくフィロソフィーを！

武田 康弘 2019年11月20日

天皇 system + ism は、集団同調 ism を生み、理性を育てません



—古代の実存思想—

ソクラテス 前469 ~ 399
 ブッダ 前463 ~ 383 (中村元)
 老子 前320 ~ 250 (保立)

ブッダ (釈迦) の中心思想は「天上天下唯我独尊」。SMAPの「世界に一つだけの花」は、その分かりやすい現代バージョン。すべては「縁」により起こると言う真実を明らかにし、拠り所は自分自身と法則であると説いた。慈悲に満ちている。ほぼ同時代に活躍したソクラテスは、エロース (恋愛) を動力源として個人の考える力と善美に憧れ真実を求める生き方を至高とした。問答法により、思慮の点では、知識人は、ふつうの人に劣っていることを示した為に恨みを持った。女性原理につく中国の老子は、水のようなしなやかさを理想とし、悠然と道を歩み、内から湧れるパワーある徳を説き、孔子の道徳を批判した。女男の性愛による結びつきを重視し、そこから公共や国を考えたと。[学を絶てば憂いなし]

恋知

φιλοσοφία
 プロソピア
 Philosophy



Love of thinking

事象学ではなく意味論の世界へ。
 (受験知) (本質論)

ネオテニー (幼態成熟) - 人間の生物としての特性

neos (若さ) + teine (延長) ヒトは、大人にはならない。
 20世紀の人類学者・モンターギュー
 競争原理から納得原理へ。
 それが人類進化のほんらいの方向。



他力念仏の法然門徒は、後鳥羽上皇らにより弾圧され、親鸞は佐渡に高流しとなり、4人が死罪となる。
 親鸞は、中世日本の実存思想の中心。「善人でさえ往生できる (救われる) のだから、悪人はなおのこと」浄土真宗はわが国最大の宗派で、晩年のハイデガーは、西欧哲学から離れ、親鸞思想に傾倒、心酔した。



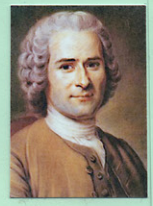
親鸞 1173 ~ 1262

「不滅の恋人」に象徴されるように、恋愛はベートーヴェンの創作の源泉。自由と平等の【共和制】(王や貴族はいない) による人類の解放と個々人のよるこびを歌う交響曲9番【合唱】は、全世界で最も敬愛されてきた傑作。今なお現代的・未来性をもつ作品も多い。



ベートーヴェン 1770 ~ 1827

第九よるこびの歌



生前は、恋愛小説家として著名。同時に発表された【エミール】(教育論の古典といわれる大著) と【社会契約論】(古代アテネの直接民主制に範をとり、人民主権による社会の原理を示した) は、近代民主主義を拓いた名著。

ルソー 1712 ~ 1778



Greatest Love of all



作詞リンダ 1948-1986 歌ホイットニー 1963-2012 アリの自伝映画 1942-2016
 ホイットニー・ヒューストンの一番愛した歌
 「自分自身を愛することを学ばば、それは、最も偉大な愛となる。」
 (リンダ、訳タケダ)

世界に一つだけの花

SMAPの皆が愛した最大のヒット曲。
 (作詩・作曲・横原敬之)



「感じ 想い 考える 私」が座標軸

意味をつかみ、真実・truthを探求する。

人間の価値は、知識・履歴・財産の所有ではなく、存在の魅力にあります。そこにいるだけでよいのです。

外的 (世間的) 価値に合わせ従うのではなく、内的真実と意味充実の生を歩むのが、人間のほんらいの姿です。

沈思と自問自答、静かに自己を見つめ、内から内発的に思考する。その土台のない【対話】は無意味です。

序列と形の日本文化を超えて、内容と意味にあふれる世界へ!

武田康弘

青空を見る習慣を! 創立1976年~

原上天外創設会 1979年~ 1976年~ 2015年4月0回式恩賜キヤンプディング (63歳)



2008年1月参議院での討論会 (55歳) 白樺教育館 2014年 白樺教育館・新館落成10周年 (62歳)

実存は、本質に先立つ



サルトル 1905 ~ 1980

人間は、自由から逃げることはできない。実存的倫理、実存的精神分析。20世紀フランスの実存主義者サルトルは、ノーベル文学賞を辞退。日本の受容は竹内芳郎が中心。

私と共和制
 楽しい公共社会を生むために
 十人集思の三分割と参加

武田康弘
 白樺教育館

天皇は、国事行為から解放され、文化と国際親善に専念。人権の回復と共和制へのスムーズな移行が必要。
 江戸城ではなく、ほんらいの住まいである京都御所に戻れることが求められる。

武田 康弘 プロフィール (ウィキペディアより引用)

武田 康弘(たけだ やすひろ、1952年5月14日 -)とは、日本の哲学者(恋知者)、教育者。白樺教育館館長、白樺文学館のコンセプト立案者及び初代館長。

現代の大学などで教えられる一学問としての哲学を批判し、ソクラテスによって生み出されて定義された本来の意味として、哲学を捉えなおす恋知思想の提唱^[1]や、現在の公務員制度を維持する思想的土台への批判とその観点による参議院の現職公務員に対する講義^{[2][3][4]}、中学生等に対する丸刈り強制(丸刈り校則)に象徴される管理教育への批判や体罰問題等の是正を行った活動^[5]などで知られる。また、2009年に参議院事務総長より参議院行政監視委員会の客員調査員に任命され、国会に勤務する官僚へ日本国憲法の哲学的土台について講義を行う^[6]。

略 歴

1952年、東京都千代田区神田須田町生まれ。

学生時代より大学内哲学に疑問を抱いており、これがのちの思想形成に繋がる。

1976年に千葉県我孫子市に私塾を開設、同時に『我孫子教育研究会』を主宰し児童教育の在り方を模索するかたわら、1982年にジャン＝ポール・サルトル やメルロ・ポンティ等の邦訳者・紹介者として知られる哲学者、竹内芳郎に師事する。

1987年、自身の手で『我孫子哲学研究会』を、1989年には竹内と共に『討論塾』を立ち上げ、市民の政治参加のための新しい思想(公共思想)を考え、またそれを支える市民同士の対話文化を生むための活動などを行う^[2]。この時の活動と思想は、第8・9・10代千葉県我孫子市長である福嶋浩彦による我孫子市政運営の、思想的土台となった。また同時期に我孫子市の中学校で行われていた管理教育を是正する運動を行い、体罰問題などの是正を行う^[5]。

1999年、我孫子の地に『白樺文学館』を創設する構想を練り、武田哲学に賛同して



武田康弘(2011年1月撮影)

生誕 1952年5月14日(68歳)

日本 東京都千代田区神田

時代 20世紀 - 21世紀

地域 現代思想

学派 在野

研究分野 哲学

主な概念 恋知

影響を受けた人物:

ソクラテス、プラトン、
ブッダ、老子、親鸞、
柳宗悦、ジャン＝ポール・
サルトル、アシュレー・
モンタギュー、竹内芳郎

影響を与えた人物:

福嶋浩彦、佐野力

いた佐野力(日本オラクル)の資金協力の元、白樺文学館の建物や収蔵品の選定と収集、また館内の展示等全コンセプトの設計を行い、白樺文学館初代館長に就任する。

2004年に自身の私塾を発展させた『白樺教育館』を創建し、小学生から大人までの全年齢を対象とした『意味論による教科の学習』と『対話方式による哲学授業(恋知)』を行っている[2]。

参議院での活動

2008年1月22日、公共哲学論争を巻き起こした武田と、公共哲学運動の中心人物である金泰昌(公共哲学共働研究所所長)、山脇直司(東京大学大学院教授)、また現職の公務員である荒井達夫(参議院総務委員会調査室)を合わせた4名でのパネルディスカッションが、参議院内にて行われた[3][7]。

この時武田が示した「国家公務員法第96条の理念を哲学的に説明する公務員倫理の原理」(武田思想)は、後に行政監視委員会調査室が注目する竹田青嗣の「公共的良心の概念」(竹田思想)と共に、『公務員制度・公務員倫理について「主権在民」の原理を徹底し公務を正常化させる為不可欠である』との意見調査書が行政監視委員会調査室により纏められている[8]。

主な思想

氏は哲学書の読解に終始する既存の哲学に対して問題提起を行っており、その実践として積極的な思想提言・発信をしている。以下に主な思想を提示する。

- ・ 氏の思想的土台として、既存の大学内哲学を批判し、人間のネオテニーとしての特性(アシュレー・モンタギュー)に着目して、『体験に基づき自分の頭で考える』という意味で哲学を再定義する為に、恋知(れんち)思想を提唱している。
詳細は「恋知」を参照
- ・ 近代西洋哲学は、キリスト教神学=スコラ哲学の改革として、デカルトに始まりハイデガーにより終焉した思想史であると指摘する。それを超える為には、近代西洋哲学と異なる発想に立つ必要性があり、同時にキリスト教等の一神教的思想世界とも決別した上で、新たに哲学的思想を発展させて行く他に無いと指摘する。古代の実存思想(アテナイのソクラテス、インドのブッダ、中国の老子)に学ぶ必要性を指摘し、それを実践する”恋知の営み”を提案している[9][10][11]。

- 人権思想について、キリスト教圏で育まれた唯一神の存在を必要とする思想ではなく、幼子の存在を前にした時の自然な愛情を淵源とする、より普遍的な思想として人権思想を再定義し直す事が必須であると指摘する^[12]。
- 日本社会における集団同調的社会風土や、教育の本質を「受験を目的とする学習」とする現状等の現代日本社会が抱える諸問題の深因は、根強く残る戦前思想にあると指摘し、厳しく批判している^[13]。明治政府が作成した、天皇を絶対的な中心に据え上下倫理に重きを置く近代天皇制(大日本帝国憲法下の天皇制)の道德観念には根本的な問題があると指摘し、この道德観念が亡霊のように現代社会に生き続ける限り、総合的判断力としての個人の理性を獲得できない、即ち道德を獲得できないとする。武田は、白樺派の文豪である志賀直哉の『こんな奇妙なものが無ければならないのかしら？天皇というのはおそらく人間ではあるまい、単に無形の名らしい。[14]』という見方を自身の思想と重なるものとして紹介し、“天皇という記号”により生まれる“タブーを含む社会”は、無意識領域まで管理され思考しない人間を生んでしまうと指摘する。この事は現代日本人の人生観や生き方にも大きく影響していると指摘し、これを超克する必要性を訴え、より善い市民社会の実現と豊かな人間性を開花させる為の実存思想として、“恋知”を思想的土台とする事を提唱している^[13]。
- 唯一神への信仰である一神教やその亜流である西欧哲学を前提とした人権思想・民主主義思想を改めた上で、“恋知”を元に天皇制から共和制への移行が必要であると指摘している^[15]。

出典・脚注

1. ^ 金 泰昌 『ともに公共哲学するー日本での対話・共働・開新』 東京大学出版会、2010年。ISBN 978-4130101172。
2. ^ a b c 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008年2月。ISSN 0915-1338。
3. ^ a b 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008年4月。ISSN 0915-1338。
4. ^ 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008年11月。ISSN 0915-1338。
5. ^ a b 岩波書店 (1992-08), 『世界』, 岩波書店, ISSN 05824532
6. ^ “社会人-第58話「街の哲学 人を動かす」”. 日本経済新聞. (2009年11月22日朝刊)
7. ^ [パネルディスカッション「公共哲学と公務員倫理」～民主制国家における公務員の本質](#)

～平成 20 年 2 月 20 日内閣委員会調査室・総務委員会調査室・行政監視委員会調査室

8. ^ [キャリアシステムと公共哲学 ～行政運営の思想的土台について考える～](#)平成 21 年 10 月 1 日 行政監視委員会調査室
 9. ^ 『人類思想の三分類 「儒教・儒学」、「ソクラテス・ブッダ・老子の実存思想」、「キリスト教・イスラム教などの一神教」と「恋知』』 [1]
 10. ^ Three Schools Of Thought That Have Impacted Humans Up Till The Present[2]
 11. ^ Three Schools Of Thought That Have Impacted Humans Up To The Present [3]
 12. ^ 『人権思想の淵源は宗教ではない』 [4]
 13. ^ a b 『明治政府がつくった 天皇という記号』 [5]
 14. ^ 志賀直哉 『志賀直哉全集 補巻 5 補巻五 手帳・ノート(一)』 岩波書店、2002 年 2 月 5 日。ISBN 978- 4000922371。
 15. ^ 『私と共和制 楽しい公共社会を生むために』 [6]
-

関連項目

- ・ [恋知](#)
- ・ [竹内芳郎](#)
- ・ [アシュレー・モンタギュー](#)
- ・ [参議院](#)

カテゴリ:

日本の哲学者 | 日本の教育者 | 東京都区部出身の人物 | 1952 年生 | 存命人物

最終更新 2021 年 1 月 4 日

明治政府がつくった 天皇という記号

2020年2月23日初版 第1刷
2021年2月10日第2版 第6刷

定価 700 円

発行：白樺教育館

千葉県 我孫子市 寿 1-20-1

☎ 04-7184-9392

Mail: shirakaba2002@k.email.ne.jp

ホームページ：<http://www.shirakaba.gr.jp>



印刷製本：白樺印刷所 Furubayashi Tel. 04-7183-3855